サザエ＝サン

サンシタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オサカナを咥えたドラネコを追いかけネオサイタマの闇をサザエ＝サンが裸足で走る！

走れ！サザエ＝サン走れ！

目次

#1　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション（邦題：父さん発明の母）　1
#2　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　7
#3　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　13
#4　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　20
#5　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　30
#6　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　39
#7　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　46
#8　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　56
#9　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　68
#10　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンベンション　78
#1アビス・フィッシュ・カオス　97
#2アビス・フィッシュ・カオス　104

#3アビス・フィッシュ・カオス 112
#4アビス・フィッシュ・カオス 120

#1　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション（邦題：父さん発明の母」

#1　ダディ・イズ・マム・バイ・インヴェイション

夜の帳が街を覆い尽くそうとする頃、ネオサイタマ郊外のアサヒ・ヒル駅に列車が到着した、くすんだ銀色の車体には「バカ」「自分を前後」「お前を前後」……暴力的な言葉や猥褻なグラフティーがところ狭しと施され就役当初の姿は見る影も無い、列車はマグロめいた眼のサラリマン達を吐き出し慌ただしく発車した。

駅前のメインストリートは、サラリマンや主婦、無軌道学生、サイバーゴス、ヤクザ…種々雑多な人々が極彩色のグラデーションを描き出す。

「安い、実際安い」「お買い得」「決断的に購入」人々の欲望を掻き立てるネオン看板やLEDボンボリ、街灯に集る蛾の様に商品に群がる人混み、店頭には食料品を中心に様々な商品が並ぶ。

店先で主婦が値段が上がったサシミにため息をつき、広場では大音量で演奏するインディーズ・アンタイブディズムバンドが冒涜的な歌詞をまくし立てる、その前を顔をしかめた老人が通り過ぎた、物陰で無軌道学生がヤクザにカネを渡し何かを受け取って足早に立ち去った。

それらを無視し、男は家路を急ぐ、その表情は疲れが浮かんでいるが明るく足取りも軽い、何しろ久しぶりのテイジ・アワー帰宅であり娘婿のマスオ＝サンも早く帰宅出来るという、快く帰らせてくれた会社に感謝しつつ男は家路を急ぐ、男の名はイソノ・ナミヘイ、イソノ家の大黒柱である。

ナミヘイの歩みが止まる、ストリートの片隅に人だかり、群衆のざわめきに混じり「実際安い！」「お値打ち！」「オミヤゲ！」販売員の宣伝文句に誘われ思わず人混みに足が止まる。

（（オミヤゲ…どれ覗いて行く位なら構わんだろう））彼のニューロンに浮かんだものは愛する家族の笑顔、ナミヘイは人混みへ歩を進める。

そこでは販売員の男が家電品デモンストレーションをおこなっていた、「特許技術」「ハイッテック」「テクノロジー」「オムラ」先端技術をアピールするＰＶＣノボリ、男の背後の液晶モニタにはカチグミめいた身なりの一家がその製品を使用する様子のＰＶが洒落たＢＧＭと共にエンドレスで流れている、そして展示台の脇に立った販売員の手にはハンドボールめいた球体が。

「……エーと言う訳でこの全自動タマゴ割り機『トテモ・タマゴ』の実力を皆さんに見ていただきたいと思います」サイバーサングラスを掛けた男が「実演」「販売」と交互にＬＥＤを発光させながら製品のアピールをおこなっていた、男が手にもつトテモ・タマゴをひとしきり周囲の客に見せつけるようにアピールしてから展示台の上に置く。

群衆はタマゴ割り機のデモンストレーションを興味深げに見物するが、やがてこの機械の致命的な問題点に気づき一人、また一人とその場を離れ男とナミヘイの二人だけとなった。

ナミヘイは先ほどの実演に深く感嘆していた、世間のハイテック化はここまで来てい

たのかと、自分は実際ハイテックには疎い、仕事で使う情報端末や演算装置ならともかく家電製品の類いは全く理解できない、これが有れば妻の家事も楽になるのではと。

ナミヘイに男が声を掛ける、「お客さん、このマシンが気に入ったようですね？お一ついかがですか？」男は脈がありそうなナミヘイに声を掛けた、「ん？ああ、つい見入ってしまったよ、最近の家電はたいしたものですな」ナミヘイは視線をタマゴ割り機から男に移し返答する。

「オムラ・ホームテックの最新製品です、まだ何処も取り扱っていません、ここ一ヶ所だけの先行販売です、来週ネオサイタマ各地で一斉販売します」販売員はサイバーサングラスを点滅させながら語る、「うーむ……」吸い込まれる様に見つめるナミヘイ、「タマゴを割りますドスエ」タマゴ割り機が人工マイコ音声で喋る。

「オムラはいいですよ、品質は確かですし保証も充実しています、何より、革新的です。家電のリーディングカンパニーは伊達じゃない」サイバーサングラスが怪しく点滅する、「うーむ……」吸い込まれる様に見つめるナミヘイ「タマゴを割りますドスエ」タマゴ割り機が人工マイコ音声で喋る。

「安い買い物では無いです、しかし金額以上の価値が実際有ります」「分割払いがトテモお得です、金利手数料が実際安い、サービス期間中でポイントも倍点！」サイバーサングラスが激しく点滅する、「うーむ……」吸い込まれる様に見つめるナミヘイ、タマゴを割りますドスエ」タマゴ割り機が人工マイコ音声で喋る。

「家族の幸福はお金で買えますか？家族の笑顔はお金で買えますか？想像してくださいタマゴ割り機が有る生活を」サイバーサングラスが激しく点滅する、「うーむ……」吸い込まれる様に見つめるナミヘイ、「タマゴを割りますドスエ」タマゴ割り機が人工マイコ音声で喋る。

ナミヘイの意識にタマゴ割り機を購入しなければならないという強迫観念が刷り込まれる、サイバーサングラスをマグロめいた眼で凝視する、「決断的！」「購入！」「決断的！」サングラスに表示されるメッセージの間に０．０１秒３Ｄホログラフィックスのタマゴ割り機がナミヘイの眼に飛び込む、ナムサン！只のサイバーサングラスでは無い！洗脳サングラスだ！

視覚・聴覚ダブルの洗脳にナミヘイのニューロンは容易く屈した、目の前に愛する妻子の姿が浮かび上がり彼に語りかける。

（（お父さん、ありがとうございます））愛する妻、フネの声、（（お父さんありがとう））（（ワースゴイ！））（（私にも触らせて））（（ボクもデスー））愛する子供達と孫（（ミャーオー））飼い猫の声、彼は遂に決断した。

「よし、それを購入しよう」「アリガトウゴザイマスー！」購入手続きを済ますと商品を受取りナミヘイは再び家路を急いだ。

＃2　ダディ・イズ・マム・バイ・インヴェイションに続く

#2　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

駅前から歩いて程無くナミヘイは自宅に到着した、ドアを開け妻を呼び出す、「オーイ、母さん」家の奥からフネとカツオが迎えに来た、「お帰りなさい、今日は早かったですね」

「イイモノを買ってきた、ホレ」ナミヘイは手に持っている包みを得意気に見せつける。

「オミヤゲ?」カツオは尋ねる、「実際驚く主婦の味方だよ」ナミヘイは満足気に答えた。

◆ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション◆

「全自動タマゴ割り機?」この家の長女、フグタ・サザエが訝しげに尋ねる、彼女のファミリーネームが違うのは家庭の事情である、その胸は平坦である、チャブ・テーブルの上に置かれたマシンを興味深げに見める一同、「どうやるの?」次女のワカメが聞き、「見せてください」サザエの息子でナミヘイの孫でもあるタラオが続く。

「まぁ待ちなさい」ナミヘイは取り扱いマニュアルに目を通しながら答える、その髪型は

奇妙だった、「手で割った方が早んじゃないか?」「ちょっとやめなさい」ボンズめいた髪型の少年、カツオの発言をサザエが遮る、空気を読んだのだ。

「まずはタマゴを入れる」本体上部の球体を開けナミヘイがタマゴをセットし、閉じるとキャバァーン!キャバァーン!キャバァーン!「タマゴを割りますドスエ」電子音と人工マイコ音声が響きＬＥＤが激しく点滅する!

「そしてレバーを引く」マニュアル通りにレバーを引くとマニュピレーターがタマゴをキャッチ!

「イヤーッ!」マイコ音声と円柱状のハンマーがタマゴを打ち据えマニュピレーターが左右両サイドからタマゴを持ち上げた、中身は下の受け皿へ、見事にタマゴが割れた!ワザマエ!

「良くできてるネー!」「オモシロソウ!」「サワラセテ!」子供達は目を輝かせてタマゴ割り機を見つめる、ナミヘイは満足気に「壊さぬ様にな」「「ヤッター!」」タマゴ割り機に集まる子供達、「どうだい母さん、コレがあれば少しは楽になるだろう?」胸を張り

尋ねるナミヘイに「エッ……エェ…」困惑した様子で答えるフネ。

キャバァーン！「タマゴを割りますドスエ」「イヤーッ！」タマゴが割れた、「タノシイ！」「アタシにも！」「ボクもデスー！」キャバァーン！「タマゴを割りますドスエ」「イヤーッ！」キャバァーン！「タマゴを割りますドスエ」次々に割れていくタマゴ、「とんだ主婦の味方ね」サザエとフネは顔を見合せ苦笑する。

キャバァーン！「タマゴを割りますドスエ」「イヤーッ！」キャバァーン！「タマゴを割りますドスエ」「イヤーッ！」キャバァーン！「タマゴを割りますドスエ」「イヤーッ！」タマゴが次々と割られていく、「それよりは父さん、こんなにタマゴを割ってどうするの？」「夕飯のおかずにすればよかろう」事も無げに答えるナミヘイ、「夕飯はダシマキ・タマゴにしようかね？」フネは答えた。

……

「ビャァ〝ァ〝ァ〝ァ〝ァ〝ッ!!ウマヒィ〝ィィ〝ィ〝!!機械で割ったタマゴは実際一味チガウ事デスネ」

ダシマキ・タマゴを口に入れたこの家の婿、マスオが叫んだ、彼は自分の立場を良く理解していた。

実際タマゴを手で割ろうが機械で割ろうが味に変わりは無い、しかし、それを正直に指摘すればこの家でムラハチになってしまう、自分を守る為タイコモチめいたオセジを口にする、心にも無いオセジを上司や同僚、取引先の人間にするのはサラリマンにとってチャメシ・インシデントである。

「サスガ、マスオ君だ、タラちゃんはどうだ?」ゴウランガ!ナミヘイはマスオのオセジを真に受け更に上機嫌でタラオに尋ねる、「ひとあじデス」タラオも満面の笑みで答える、純粋な子供には本当に味が違うように感じるのだろう　。

「そうか、そうか、我ながらイイ買い物をしたものだ」孫の様子に目を細めるナミヘイに「一体何処で買ってきたの?」サザエが聞く。

「通りで実演販売してたんだよ、そのうち一家台の時代が来るかもしれん」しみじみと語るナミヘイ「一家に一台ですか?」驚くフネ　。

ナムアミダブツ！なんたるマッポー的未来予想図か！闇黒メガコーポの下、人の営みがネコソギにされタマゴを割るという行為さえ血の通わぬ機械に取って代わるというのだろうか！

「せっかくだから明日もタマゴ割り機に活躍して貰おうよ」しかし、そんなメガコーポの思惑などネオサイタマの一般市民、ましてや年端の行かない子供が解るはずもなく無邪気にカツオは語る、明日もタマゴヤキかと問うワカメに「スキヤキだよ」と返しナミヘイもそれを許可した、場の空気、ナミヘイの機嫌を読んだ実際見事なアブハチトラズである、ワザマエ！

一方その頃

一台の家紋ハイヤーがオムラ・ホームテック本社前で停車した、警護のクローンヤクザ達が周辺を警戒する中、一人の男が車から降り立つ、男の名はスティーブンス・オムラ、オムラ・ホームテックを率いる若きＣＥＯである、長身痩躯、眼光は鋭く神経質そうな顔立ちの男である。

＃3　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃3　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

一台の家紋ハイヤーがオムラ・ホームテック本社前で停車した、警護のクローンヤクザ達が周辺を警戒する中、一人の男が車から降り立つ、男の名はスティーブンス・オムラ、オムラ・ホームテックを率いる若きＣＥＯである、長身痩躯、眼光は鋭く神経質そうな顔立ちの男である。

二十代にしてオムラの不採算部門、オムラ・ホームテックＣＥＯに就任した彼は、決断的な社内粛清と洗脳社員研修を徹底し、ドラスティックな組織改革を断行したのだ、その結果、カチグミ社員五十人以上がセプクやケジメを強いられ、マケグミ社員の半分を解雇する一方、ＺＢＲやバリキ、タノシイドリンクなどの薬物の無償配給により人件費を大きく減らしつつ生産効率の向上をやってのけるという離れ業をやってのけたのだ。

彼は業績改善の為の努力は惜しまなかった、ライバル社経営陣や技術者の暗殺、工場や資材に対する破壊工作、他社製品へのネガティブキャンペーン…これらの企業努力に

より、トウチバ、マチュシタ・エレクトロニクス社、エレファント・シンボル社など同業他社は大きく業績を悪化させる一方、オムラ・ホームテックのみが右肩上がりの成長を続け、社長就任から十年過ぎた今業績シェア９０％を占めるリーディングカンパニーとなったのである。

スティーブンスは秘書や護衛を引き連れオスモウ会議室へ向かう、部下からの業務報告を聴きながら圧縮スシ・バーを口にする、一見不作法だがこれが彼のビジネススタイルである。

スシを一本食べきるとマシンガンめいた勢いで部下に指示する、周囲のある者は手元の情報端末に入力し、又ある者はＩＲＣ端末で何処かに連絡する、指示が一通り終わると再びスティーブンスはスシを口にし部下の報告に耳を傾ける。

会議室に着くまでに三本のスシ・バーを食べた、これが今日の夕食である、彼からすれば必要なカロリーさえ取れればそれで良く、食に楽しみを求めるなど愚の骨頂だと感じていた、そしてその姿勢は食だけでは無くありとあらゆる事に共通していた。

会議室にはすでに数十人のスタッフ達がドヒョウ・戦略チャブに着席していた、彼らはスティーブンスが入室するや否や一斉に立ち上りアイサツをする「「「「ドーモ、お疲れ様です、スティーブンス社長」」」」おお、なんたる一体感か！迷いが実際無い！クローンヤクザめいた統率！これが研修の成果だ！「座りたまえ」スティーブンスは満足気に頷き着席を促す。

会議室には「センシュラク」「キンボシオオキイ」「ヨコヅナ」「満員御礼」…力強いオスモウフォントのショドーが天井から吊るされ、壁にはオムラ・インダストリの歴代会長の肖像画が掲げられていた。

今回のここに集ったメンバーはあの全自動タマゴ割り機の研究・開発・宣伝・販売、各チームの代表である、販売初日の結果報告とその検証の為に集められたのだ、彼らの顔色は皆、一様に悪い。

「よし、それでは始めるか、まず販売チーム、販売実績を報告しろ、何分で完売した？」スティーブンスは自信満々で尋ねる、何しろ今回の製品は企画から研究開発、製品ＰＶの決定、初期出荷量などほぼ全て自分が関わっているのだ、売れない訳が無い。

「……完売しませんでした……、ハイ」販売チームのリーダー、スズキは消え入りそうな声で報告する、その顔色は悪い。

「ナンだと…」報告を聞いたスティーブンスのメガネが光る！

「売れ残るとはどういう事だ、販売数量、営業時間、出店場所！人の流れ！売れ残る要素などないぞ！私が決めたのだ間違いは無い！……それで幾ら売れ残った」沸き上がる衝動を何とか抑え詳しい報告を求める。

「……一個です」スズキの顔色が更に悪くなり、全身が小刻みに震えだす、「一個だけ売れ残ったか…」落胆した様子のスティーブンスにスズキは更に小さな声で報告する、「いえ、一個売れ残ったのでは無く一個だけ売れたのです、つまり売れ残りは九十九個」

「ザッケンナーコラー！」スティーブンスの怒りがついに爆発した、「どういう事だ！お前ら一体何をやっているんだ！」机を叩きつけ立ち上りスズキを睨み付ける！

コワイ！

「アイエエエ！スミマセン！スミマセン！」スズキは恐怖に震えながらオジギをして許しを請う、「スイマセンでスムカーツ！スイマセンで済んだらマッポはいらん！」スズキの謝罪はスティーブンスの怒りに油を注いだ様だった「それでお前らはどんな商品アピールを行ったのだ！」メガネを光らせスティーブンスは問い詰める。

スティーブンスに執拗に責め立てられるスズキ、((スズキ＝サン…))その場にいる社員、特に研究・開発・宣伝各チームリーダーは沈痛な面持ちで罵倒されるスズキを見守る、だが、おおナムサン！彼ら胸中は同僚が出世コースからドロップアウトし競争相手が減った事に対する暗い歓びに満ちているのだ！

しかし、それを表情や態度に表す事は決して無い　、ウカツにも態度に表そうものなら奥ゆかしさを欠いた人間と見なされムラハチにされてしまうのだ、サラリマンの世界は上に行けば行くほど実務能力以外の部分…ハイクや奥ゆかしさといった要素が重視されるのだ、そしてムラハチになればその先に待つものは惨めなマケグミ人生である、((良くてケジメか…))((スズキ＝サンの後任はオコゼ＝サン辺りか…))((彼の所属派閥は大打撃だな))…もはやスズキの存在は意識する価値は無く、今後の社内の勢力図や

利権の配分に考えを巡らせていた。

「…つまりお前は以前の成功体験に溺れ十分な配慮を怠ったのだ！勝ってメンポを確かめよという…バカッ！環境に文句を言う奴に晴れ舞台は一生来ない！」スティーブンスのスズキに対する糾弾はまだ続いていた、スズキが弁解を一言口にするごとに倍以上の勢いで罵倒される、豊富な語彙、ミヤモト・マサシのコトワザを引用するあたりにスティーブンスの高い知性が窺える。

そんな中、秘書の一人がＩＲＣ端末を持ってスティーブンスの元に駆け寄って来た、「社長、アルベルト会長、モーティマー社長のお二人からお電話です」うやうやしく端末を差し出す、スティーブンスは忌々しげにそれを受け取った。

「ドーモ、スティーブンスです、ご無沙汰しております、最近は手が離せない案件が多くご挨拶が…イエイエドーモ…とんでも無いことです」忌々しげに端末を受け取ったスティーブンス、だがライス・グラスホッパーめいた調子で頭を下げながらそれを感じさせない様子で受け答える。

「エッこれからですか、…分かりました、直ちに伺います、それでは」通信を切るとその場の社員達に告げる、「急にアルベルト会長とミーティングする事になった、私はこれから本社に向かわねばならない、君たちは私がここに戻るまで今後の対処方針についてミーティングしていてくれ、…それからスズキ＝サン、君は私が戻って来たらケジメをしてもらう」スティーブンスは部下の一人に全自動ケジメ装置の準備を指示すると会議室を後にした。

＃４　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃４　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

ＰＭ２２：００

アルベルト会長、モーティマー社長との面談に向かう車中、スティーブンスは部下達の不甲斐ない有様に嘆息していた、彼は不採算部門だった家電部門を立て直した自身の手腕に強い自信を持っていたがその裏返しで部下の能力に常々疑問を持っていた。

（（もう一度社内を引き締めねば…））流れる車窓に目をやりながら社内の粛清を決意する、上空には武装マグロツェッペリンが漂いその巨体を威圧的に誇示し、視線を地上に戻せば無数の対空兵器が空を睨む、その脇をマグロめいた目をした労働者達が無心に作業に取り組み歯車めいて働く、様々な機械の駆動音が心地良い。

スティーブンスを乗せた家紋リムジンは更にオムラ本社内を進む、自治体その物が要塞化されたオムラ本社は実際に広大でありホームテック本社が存在する区画とインダストリ本社の区画とはかなり距離がある。

彼の思考はいつしかオムラ・インダストリ本社とアルベルト、モーティマー親子に移っていた、スティーブンスは彼ら親子の……正確には現社長、モーティマーの会社の運営方針に強い不満を抱いていた。

((あのイディオットめ…何がモーター理論だ!))心の中で罵倒する、((質量と火力の追及?ニンジャとロボットの融合?それを中心にした兵器形態?研究開発の予算はどうするのだ!そんな寝言は政府から予算を引っ張って来てから言え!))苛立たしげに頭を掻きむしる。

だが彼の不満はもっともな話だった、実際モーティマー・オムラの社長就任以来株価は伸び悩んでおり優秀な社員の退職やセプクが目立つようになってきた。

((……やはり私が…私がオムラを立て直さなければ!))頭を掻きむしる手が止まる、((モーティマーの方針に不満を抱いている者は多い…彼らを糾合しモーティマーを引き摺り降ろす))スティーブンスのニューロンに危険な野心が疼く!

((不満を持つ重役らは既にネマワシ済み、オハギやオイランを宛がってある、ラオモト

＝サンにも大トロ粉末やコーベインを贈っている、妨害は無い筈、後は決起のタイミングだ）

車は走り続ける。

……

本社に到着したスティーブンスはボディチェックを受け会長室に案内された、奥ゆかしくドアをノック、「失礼します、スティーブンスです」「ハイリ、ナサイ」インターフォンから苦し気なサイバネ音声が返る。

ドアを開けると三人の男達がいた。

部屋の奥、巨大な介護用ソファーに座り、巨大な戦略チャブに向かう着物姿のミイラめいた老人、この人物こそ巨大闇黒メガコーポ、オムラ・インダストリ会長アルベルト・オムラその人である、「ヨク、来テ、クレタ、カハーッ」苦し気に息継ぎをしながらもハッキリとした口調でスティーブンスに語りかける、その眼光は鋭く年齢を感じさせない。

そんなアルベルトに傍らの多彩めいたニンジャ装束の男が呼吸器を差し出す、彼の名はオメガ、数多くいるオムラの企業ニンジャの中でも別格の存在であり、その戦闘力は全身の９０％以上をサイバネ化したネブカドネザルをも凌ぐと言われている。

そして、そんな二人を忌々しげに睨みつけるパワードスーツに身を包んだ中年男こそ現社長、モーティマー・オムラでありこの三人の男こそオムラ・インダストリの首脳である。

（会長も老いたな、健康状態も悪化したか、だが第一線から退いてからの方が神経を使うとはどういう事だ？……だがあの眼光、気力は萎えてはいない様だ、サスガと言うべきか）

そして視線をモーティマーに移す。

（相変わらずマヌケ面をさらしているな、愚鈍も此処までくると毎日が楽しいだろう）

ニューロンに浮かんだスゴイ・シツレイな感想を一切感じさせない、にこやかな表情でスティーブンスは丁寧にアイサツする。

「……良く来たな、と言いたいが一体何の話だ、パパに言われて此処にいるけどボクはネブカドネザルの新装備のテストをしなきゃいけないんだ」口を尖らせ不満を表すモーティマー。

「カハーツ、ワシガ呼ンダ、ノダ、バカメ」アルベルトがモーティマーを叱責する、「キサマノ、オモチャナド、ドウデモ良イ、カハー」辛そうにサイバネ声帯を震わせ言葉を吐き出す。

「キサマハ、オムラノ、総帥トシテ、自覚ヲ、モテ、カハーツ」モーティマーを睨みつけ糾弾を続ける、「モーターツヨシ、ダカ、タダシイ、ダカ、知ラ「パパは黙っててよ、此処はボクの会社だ!·社長はボクだ!·」アルベルトの言葉を遮りモーティマーが怒鳴る。

「カハーツ·スティーブンスヲ、呼バネバナラヌ、事案ガ起キタノダ!·」ディストーション怒声を張り上げモーティマーを怒鳴るアルベルト、怒鳴ったのが良くなかったのか再び発作が起きた様だ、オメガが再び呼吸器を差し出す。

「コフッ、コフッ、ヒューッ……アー遥カニイイ」発作が治まったアルベルトは「ソノ案件ハ、本社トモ無関係ニアラズ、オマエモ、オオオイニ関係スル、カハーッ」傍らに立つオメガに目配せすると、彼は一台の機械を取り出し戦略チャブの上に置いた、それは……

　それはハンドボールめいた球体に二本のマニュピレーターと受皿……全自動タマゴ割り機ではないか！

「何ヤラ、面白ソウナ、事ヲヤッテイルナ」スティーブンスに語りかける、その視線は冷ややかだ。

((何故にアレが此処に?)) 全自動タマゴ割り機を見たスティーブンスは軽く動揺した、((何故、会長がタマゴ割り機の存在を知っている)) タマゴ割り機の開発は極秘裏に行われ、ホームテックでも開発と販売に関わった社員しか知らない事案、プレスリリースも行っていない……そこまで意識が行った所で ((奴か)) アルベルト会長直属の凄腕ニンジャに思い至る、オメガが情報を盗み出したのだ。

「なんだコレ?」モーティマーが怪訝そうに首を傾げる、「コノ機械ノ売上ヤ、カハーッ販売、戦略ニドウコウ、言ウツモリハ、無イ、カハーッ」「ムシロ、プレスリリースヲ避ケ、カハーッ、クチコミ重点、メディア報道ニ、後追イサセル…悪クナイ、ダガ」口調は穏やか…否、機械めいて冷徹と言うべきか。

「カハーッ問題ハ、カハーッ其処デハナイ……オマエハ、本社ノ……特許ヲ…カハーッ出シテハイナイ最新技術ヲ…無許可デ使ッタナ?」

ナムサン!アルベルトの無慈悲な指摘!だがこの指摘は実際事実である、見るも無惨な売上だった全自動タマゴ割り機だがその開発には合法、非合法問わない手段で入手した最新技術が惜し気も無く投入されているのだ、その最たる例がオムラ本社から不正な手段で入手した最新型シリンダーである。

此れはモーティマーが開発を進めている、ロボニンジャの駆動系に使用される予定である、アルベルトにとっては不快な事だが技術の流出はそれ以上に不快な出来事である。

「なっ何だってー！それは本当か！一体どういうつもりだ！」モーティマーが顔を真っ赤にして怒声を上げる。

二人から糾弾され真っ青な表情のスティーブンス、この様子は先程彼に責められた営業チームリーダーを思わせる、正にインガオホー！

（（何とかこの場をやり過ごさねば…））落ち着きを取り戻したスティーブンスは自身の立ち位置、今後の全自動シリーズへの影響、モーティマー引き摺り下ろし計画への影響を如何に抑えるか、明晰な頭脳で打開策を練る。

「申し訳ございません！」スティーブンスはその場に踞（うずくま）りドゲザ！ドゲザをした！この行為は全面的に相手に非を認め慈悲を請う行動である、ケジメと違い肉体的に傷つかないものの、精神的な傷はそれ以上であり、例えるなら母親とのファックを強いられ記憶素子に保存されるのと同程度の、凄まじい屈辱である。

「今回の件は、部下の監督が行き届かなかった私の責任であります！」頭を床に擦りつける、「本部に戻り次第担当者は適切な処置を行ない再発防止に勤めます！又、流出した一

台につきましても可及的速やかに回収し技術流出を防ぎます！」再び頭を擦りつける（その頭髪は自然である）。

欺瞞！非合法な情報収拾はスティーブンスの命令である、なんたる鉄面皮か！

「カハーツ手柄ヲ、焦ッタ部下ノ、カハーツ暴走カ……分ッタ、オマエヲ信ジヨウ…」アルベルトの言葉に「ちょっと待ってよ！こいつの言ってる事信じるの？口からの出任せじゃないの？」とモーティマー。

「カハーツ、スティーブンスノ、此レマデノ、実績、考慮シ、今回ハ、カハーツ、信ジヨウ、速ヤカニ、機体ノ回収ト担当者ノ処罰ヲスル様にカハーツ」「ヨロコンデー！」アルベルトの言葉に胸を撫で下ろすスティーブンス、立ち上がり会長室を部屋を退出しようとするスティーブンスの背中に「カハーツ、ソウイエバ、最近、オマエノ部下タチガ、カハーツ本社ノ役員や、ラオモト＝サンニヤタラト接待、シテイルヨウダガ、カハーツ、マダ、他ニ面白ロソウナ事ヲ考エテハ、イナイダロウナ」

（（駄目だ！アルベルト会長はオバケだ！））この様子だとホームテックの未公開情報や

自分の個人情報は全て筒抜けだろう、アルベルト・オムラの恐ろしさをニューロンに刻み込まれスティーブンスは慌ただしく部屋を退出するのだった。

＃5　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃５　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

ＡＭ０１：３０

オムラ・ホームテック本社に戻る車中、スティーブンスは今後の戦略の立て直しを謀っていた、モーティマーを追い落とし自分がオムラのトップに立つ試みは会長であるアルベルト・オムラが健在な限り不可能である。

それ以前に現在の自分の地位さえ危うくなってきた、オムラ・インダストリ本社から技術を不正に入手した事、そしてモーティマーの失脚を目論見、社の内外で工作していた事が会長に感づかれたのだ。

技術の流出云々は正直さほど気にはしていない、なにしろ工業分野においてオムラと他社の技術格差は圧倒的であり、サンプル一台を入手した所で技術の解析と量産体制を確立した時点でその技術は陳腐化し、オムラは更なる技術を創造する、会長の懸念は杞憂というものだろう。

だが不興を買ったのは事実であり、かくなる上は会長から指摘された案件を速やかに解決し、会長の怒りを鎮めるより他に無い、まずは一台だけ売れたタマゴ割り機の回収だ、可能ならば購入者も物理的に排除した方が良いだろう、……プロジェクト担当者も。

ＩＲＣ端末を操作し顧客対応室に購入者への対応を指示した、車は深夜の工業地帯を走り続ける。

……

オムラ・ホームテック本社

同、オスモウ会議室

草木も眠るウシミツアワー、会議室にてタマゴ割り機プロジェクメンバー、販売チーム・リーダー、スズキは全自動ケジメ装置をセットされ同僚達とスティーブンスの帰りを待っていた。

周囲をグルリと取り囲む同僚達は「ダイジョブダッテ！」「そのうちイイコトモもアルヨ」などと口々に励ますが、正直気休めにもなっていないようだ。

「アイエエエ……アイエエエ…」スズキは憔悴しきった様子で左腕に装着されたケジメ装置を眺めた、機体に輝くオムラのロゴ、単分子構造の刃先がキラリと光る、彼はケジメを怖れている訳では無かった、社会人として自身の失態を我が身を以て償う、それは当然の事だと理解はしていた。

彼が憔悴していた理由は、この会社での自分の未来が閉ざされたという絶望感からである、他の会社ならばケジメを行えば失態は赦(ゆる)される、ケジメを行った人間に対し寛大に対応することが奥ゆかしい振る舞いとされ、その為ケジメの痕跡があるカチグミサラリマンや高級官僚は実際珍しくなく、闇黒メガコーポと呼ばれる巨大企業とて例外ではない。

だが……だがこの会社は……スティーブンス社長は違った、この会社ではケジメされたサラリマンは例外無く出世コースからドロップアウトする、そしてそれは実に狡猾かつ邪悪な方法で行われる。

ケジメされたサラリマンは新たな部署に転属される、そこでの待遇は……給料や勤務

時間は変わらないが業務内容が今までの物とまるで違うのだ！

窓の無い部屋で小学生にも出来るような簡単な作業を一日中行わせる、その間、外出はもちろん、一切の私語も禁止される。

社内の人間はこの部屋を『カンオケ・ルーム』と呼び怖れる、技術や知識、経験を徹底的に傷付け、踏みにじり　、嘲笑し、侮蔑する、いわば魂の屠殺場とでも言うべき魔窟であるからだ。

結果『カンオケ・ルーム』に転属された社員は自主的に退職へ追いやられてしまう、なんと邪悪なる闇黒社員管理か！

そんな最中、会議室のスピーカーから「社長のお帰りドスエ、お迎えをするドスエ」人工マイコ音声が響く。

その声に反応してその場のスタッフ達が姿勢を正して整列し、スティーブンスの到着を待つ、スズキもケジメ装置をぶら下げたまま整列に加わる。

ババァーン！乱暴にドアが開け放たれスティーブンスが入室する、「「「お疲れ様でした！スティーブンス社長！」」」一糸乱れぬオジギとアイサツ！そんな社員達を意に介さずスティーブンスは開口一番言い放った。

「スズキ＝サン、ケジメは中止だ！」

「アッアイエッ?!」呆けた調子で返答するスズキ、事態の急展開に理解が追い付かないのだろう。

「分からんのか？いいか？ケジメは中止と言ったんだ」スティーブンスはゆっくりと丁寧にスズキに語りかける。

「ケジメ……中止……中止?!」「そうだ、中止だ」ようやく事態を理解出来たスズキにスティーブンスは頷く。

「アッ……アハハッ……ヨカ…ヨカッタ……」全身から力が抜けその場に崩れ落ちる、

（（おお、ブッダよ、ありがとうございます、ありがとうございます……）スズキのニューロンに歓喜と安堵、感謝といった感情が満ち、目から涙が零れ落ちる。

スティーブンスはそんなスズキの様子を意に介さず言葉を続ける、「スズキ＝サン、君はセプクだ」「アッアババババーッ！」スズキは余りの事態の急変ぶりにニューロンが耐えきれず、しめやかに失禁し、失神した。

失神したスズキの前にクローンヤクザが一台の機械を転がしてきた、金色の車輪がついた漆黒の土台に、背もたれの様に金色の十字架めいた柱が立っている、オブツダンめいたその機械はザワついたアトモスフィアを会議室内に漂わせている。

「彼にはこの全自動セプク装置のモニターをやって貰う」スティーブンスは平然と口にする、会議室がザワめいた、クローンヤクザがスズキの体を抱えた。

「今回の全自動タマゴ割り機は残念な結果だったが、我々はこの教訓を生かし、更なる前進を続ける」会議室がザワめいた、クローンヤクザがスズキの体をセプク装置に載せた。

「我々の挑戦は一回や二回の失敗で挫折する様な軽い物ではない、この失敗は次の躍進の為の大いなる助走なのだ!」会議室ザワめいた、クローンヤクザがスズキの体を拘束具にセットした。

「準備はどうだ?」スティーブンスはクローンヤクザに問う、「セットが終わりました」「問題アリマセン」口々に答えるクローンヤクザ。

スティーブンスは満足げに頷くと機械の始動を指示した。

グォーン、グォーン、エンジンが回転速度を上げ、ベアリングやギアが高速回転する、シリンダーはせわしなく上下運動!機体各部にセットされたＬＥＤボンボリが神秘的な光を放つ。

機体から人工マイコ音声が大音量で「セプクしますドスエ」「セプクしますドスエ」の高らかに声をあげる。

そんな最中「……ウッ…ウーン…」スズキが意識を取り戻した、機械の駆動音と耳も

とで喚(わめ)く人工マイコ音声で目を覚ましたのだろう。

「アイエッ?!拘束?拘束ナンデ?!」錯乱状態のスズキ、彼は再びしめやかに失禁した。

「ナンデってこれからセプクするから当然だろ」呆れた様子で答えるスティーブンス、彼はクローンヤクザに合図を送った、クローンヤクザは「ハラキリ」と表記されたスイッチを押す。

「モハヤコレマデー!」人工マイコ音声が叫ぶと腕の拘束具からドスダガーめいた刃物が飛び出し腹部にその刃をあてがった。

「ヤメテー!ヤメテー!ヤメテー!」絶叫するスズキ、だがセプク装置は「イヤーッ!」無慈悲に彼の腹部を引き裂いた。

「アバーッ!アババババ!」断末魔の叫びをあげ、しばらく痙攣していたスズキだったが、しばらくして動きが止まった、人工マイコ音声からは「心肺の停止を確認しましたドスエ」

機体からは厳かなＢＧＭが流れ、カスミガセキ教区のアークボンズ、タダオ大僧正のナムアミダブツの声。

（（……これは……））聖人の殉教を思わせる荘厳さにスティーブンスは（（……これは売れる!!））新製品の成功を確信する。

大満足で機体を見つめるスティーブンス、そんな中、彼のＩＲＣ端末に受信、顧客対応室からである、端末を手に取り報告を受けたスティーブンスだがその報告は信じがたいものだった。

「顧客対応班が…全滅だと?!」

＃６ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

#6　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

【前回までのあらすじ】
　オムラ・インダストリの傘下企業オムラ・ホームテックの若きＣＥＯ、スティーブンス・オムラ、彼は本社の技術を不正入手した件とモーティマー・オムラ失脚を目論んだ件で会長アルベルト・オムラの不興を買う、自分の身の危険を感じたスティーブンスは事態を収集すべく部下をセプクさせ、本社技術を使用した全自動タマゴ割り機の回収と購入者の抹殺を指示した、しかし彼が受けた報告は回収班の壊滅という衝撃的なものだった。

「顧客対応班が…全滅だと?!」握っているＩＲＣ端末が震える、一体何事が起こったのか、スティーブンスは状況説明を求める。

「つい一分ほど前に対応班十人全員の生体反応が途絶しました、僅か一秒間の出来事でした」
　言いよどむ報告者。

スティーブンスのニューロンに確信めいた予想が浮かぶ（（ニンジャだ……だが何処が差し向けた？））トウチバ？マチュシタ？エレファント・シンボル？だが連中は最早ニンジャを雇う余裕は無いはず、では他のメガコーポ？いや現在オムラと正面から敵対している企業はいない、陰で何かしら企んでいる可能性はあるが……。

ではオムラ本社？モーティマーを失脚させようとした自分への報復？いや、余りにも迂遠すぎる、そもそも対応班だけ排除して自分に手出ししないという事が理解出来ない。

ヤクザクラン……ソウカイヤ…イッキウチコワシ……様々な可能性が思い浮かぶがどれも確証は持てない。

（……ッ！今はそれどころでは無い）自分が思考の迷路に迷い込みかけた事に気づき我に返る、（（襲撃者の詮索など後で良し！今は目の前の案件に対処しなければ……））スティーブンスは部下にの情報収集を指示した、内容は……フリーランスのニンジャの動向だ！

（ニンジャにはニンジャをぶつければ良い……だがソウカイニンジャも本社のニンジャも最早信用できん！）（フリーならばしくじっても問題は無い、いざとなったら切り捨てるのみだ）

スティーブンスのメガネが光る！

一方その頃

ネオサイタマ郊外　アサヒ・ヒル　サンチョーム

中所得者層の住居が並ぶアサヒ・ヒル、ネオサイタマでも比較的治安の良好な地区ではあるがウシミツ・アワーを過ぎるとその表情は一変する、薄暗い路地裏はヤクザや無軌道学生、重篤な薬物中毒者、サイコ犯罪者、ホームレス……社会から弾き出された者、自ら踏み外した者、それらを食い物にする者……雑多なアウトサイダーがひしめく悪所となる。

地元の人間ならばこの様な時間帯に外出はしない、やむを得ず外出する場合でも路地

裏は避けて通るだろう。

……では路地裏に一人佇むこの男は何者だろうか？ハンチング帽を目深にかぶり、耐重金属酸性雨トレンチコートを羽織ったこの男は。

男は鋭い眼差しで足元を見据える、その足元には……ナ、ナムアミダブツ！死体！死体が転がっているではないか！

ツキジめいて転がる死体は九体、全員が同じ顔、同じサラリマンカット、同じサラリマンスーツ、同じメガネ、そして流れ出ている緑色の血液……クローンヤクザにサラリマン思考ルーチンを入力したヤクザ・サラリマンだ！

（（装備している武装から見るとオムラの手の者か……）ヤクザ・サラリマンが所持する銃器からトレンチコートの男は状況を推測する。

（（発砲はおろか銃を構える時間も無かったか））視線を首筋に移す、首筋には鋭利な刃物で付けられたと思われる傷が。

（（恐らくドスダガーよりも小型の刃物……三本まとめて握り振るったか））男の考察は続く、その様子を見つめるクロネコ。

（（この狭い路地裏で九人を一瞬で斬り殺すワザマエ、そして……））そこまで思考が及んだところでけたたましいサイレンが、ネコに怯えたバイオネズミが側溝に逃げ出す。

（（近所の住民が通報したか））長居は無用、男はコートを翻（ひるがえ）し路地の奥深くに足を進める、（（……そして現場に残るニンジャソウルの痕跡、下手人は間違いなくニンジャ！））暗闇の中に、男の姿が消えた。

……

翌朝　イソノ家

イソノ・フネの朝は早い、家族全員の朝食を用意すべく誰よりも早くに起きているのだ、だが今日はダイドコロ先客の姿があり、その特徴的な頭髪はナミヘイだ、例のタマ

ゴ割り機でタマゴを割っている。

「あら、お父さんもう起きてらしたんですか?」結婚以来今までろくに家事もしたことが無い男がどういう風の吹きまわしだろうか。

「皆にメダマ焼きでも作ってやろうと思ってな、どうだ?母さんもやってみんか?」得意気に語るナミヘイ、「イイエ、私は」奥ゆかしく断るフネ、実際彼女が手で割った方が何倍も早いだろう。

「ハハッ母さんは機械に弱いからな」ナミヘイの増長はもはや天井知らずである。

……

「実際コセイ的な」開口一番カツオが発した言葉だ、事実黄身は歪み、ところどころが真っ黒に焦げている、「タマゴを割るのは上手くいったんだが焼くのに失敗してな」弁解するナミヘイ、「形が悪くてもお父さんの真心がコモッテマスカラ」ナミヘイの弁解から0．1秒でマスオのオセジ!ワザマエ!

「今度は全自動メダマ焼き機を探さなきゃネ」サザエの軽口に今度探して見ようと返すナミヘイ、((冗談だったのに))彼女はオートメーション信奉者と化した父に戦慄を覚えるのだった。

＃7　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃７　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

ＰＭ１７：３０イササカ邸

暗く締め切られた室内、一人の男がＵＮＩＸを前に頭を抱えて文章を入力、そして再び頭を抱えた、男の名はイササカ・ナンブツ、過激な性描写と暴力シーンで人気な売れっ子作家だ。

そしてサイバーサングラスを掛け、部屋の隅で腕を組み直立仁王立ちする男あり、男の名はナミノ・ノリスケ、イササカ・ナンブツの担当編集者である。

サングラスからは「監視重点」「締め切り」「打ち切り」「お前の代わりはいる」……威圧的なメッセージを次々と点灯させ無言の圧力をイササカに加える。

イササカの顔色は青白く、目は虚ろ、目元にはドス黒いクマが浮かび、足元には空き瓶や注射器が転がる。

だが、それも無理もない事だ、連日の徹夜で六十に近い彼のニューロンと肉体は最早限界に近づきつつあった。

ＺＢＲやバリキ、シャカリキ……合法、非合法問わない薬物のオーバードーズで何とか持ちこたえてはいるものの、後２～３日で彼はカロウシするだろう、もしこの場に医療関係者がいれば即刻入院させる筈だ。

イササカが体を前後左右に揺らめき奇声をあげた、睡眠不足によるものか、薬物の副作用か定かではない、虚空を見つめ、何事かブツブツと呟くと突然ＵＮＩＸに向かい一心不乱に文章を入力し始めた、その速さはヤバイ級ハッカーを思わせる、コワイ！

……

「……デキ…タ…ヨ…」イササカがボソボソとノリスケに告げる、ノリスケは小説の内容を確認するとカバンから記録媒体を取り出しＵＮＩＸに接続、データを移動させる、画面上に「データ複写中な」のメッセージとウサギとカエルが荷物を受け渡しをするアニメーションが浮かぶ。

数秒で「複写完了な」のメッセージとウサギとカエルがオジギするアニメーションに変わる、ノリスケは素早く記録媒体を引き抜くと、サイバーサングラスを外し、にこやかにイササカに告げる。

「お疲れ様でした、とりあえずゆっくり休んでください、次の作品も楽しみにしてます！」オジギをして書斎のドアを閉める、ドアの向こうから何かが倒れる音が。

イササカ邸を出ると、ノリスケの恐るべきバイオ・ハイエナめいた嗅覚が隣のイソノ家から美味そうな匂いを捉えた！（（バイオショーユとサトウ、そして……肉と脂…シモフリ……スキヤキだ！））イササカ邸から「ア……エエッ！……！……してア…ターッ！ウキエ！救…車！」悲痛な叫び声が聞こえるがそんな事よりスキヤキだ！

「イヤー美味そうな事デスネ！」実際イソノ家のチャブ・テーブルの上にはグツグツとスキヤキが煮えているではないか！鍋の中には火が通ったバイオ水牛のシモフリがワリシタにうっすらと油膜を作り野菜やトーフ、シラタキに絡み付く、立ちのぼった湯気に食材の香りが合わさって鼻腔をくすぐる。

「呆れた、もう嗅ぎ付けたの？」サザエが呆れた様子で言った、サザエだけでは無くイソノ家全員の感想だろう、ノリスケは当たり前の様にスキヤキを摘まんだ、脂したたりそうなシモフリである、彼は一度に二枚食べた、外からサイレンの音が、いったい何事だろうか？

実際彼の行ないは奥ゆかしさの欠ける振る舞いであり、囲んで棒で棒で叩かれても仕方ない行動だ。

だがナミヘイは平然としている、よほど人格が出来ているのだろう、次々とシモフリを掬って行くノリスケを機嫌良さげに見つめる。

「おい母さん、タマゴとアレを」ナミヘイはフネに告げる、自分で持ってくれば良いのだが実際テイシュ・カンパクである、「私が取ってくるわ」サザエがダイドコロに向かう。

「タマゴと言えば先日、ステーション前で妙なモノを売ってましてね」ノリスケが語り始めた、

「その名も『全自動タマゴ割り機』」「おじさんは買ったの?」カツオが尋ねる。

「買うわけ無いじゃないか、実際イディオットな」ノリスケは笑って答える、「手で割った方が早い物をわざわざ機械を使うなんて理解出来ませんよ、どうせそんな物を買うのは自分でタマゴもろくに割った事もないテイシュ・カンパクに決まってますよ」笑いながらシモフリを口に入れるノリスケ。

なんたる言い草か!たしかにナミヘイはテックに疎く、自分ではタマゴも割らないテイシュ・カンパクである、しかしここまで言われる謂《いわ》れは無い!

「オ…オイ……」マスオがノリスケの脇腹を肘で奥ゆかしくつつく。

「なんですか!?」食事の邪魔をされたノリスケは不満げにマスオの顔を見る、マスオはノリスケを見てはいない、ノリスケがマスオの視線を辿っていくと……ナ、ナムサン!ナミヘイの機嫌があからさまに悪いではないか!

どうやらナミヘイの機嫌を損ねたらしい、漸《ようや》く覚《さと》ったノリスケは

必死に話題を反らす。

「テ…テイシュ・カンパクと言ってもおじさんの事では無いですよ！オーイ、サザエ＝サン、タマゴまだデスカ！」更にナミヘイの機嫌が悪くなる、おお、見よ！ナミヘイの頭を、まるで爆発寸前のカンシャクダマめいて赤くなっているではないか！

……そしてサザエが持って来たものはタマゴと……おお、ナムアミダブツ、タマゴと先程自分が嘲笑したタマゴ割り機ではないか……ナムアミダブツ。

「かっ…買ってたんですか……」ノリスケは最早引きつった笑顔でそう返すのが精一杯だった、ナミヘイの怒りがついに爆発する。

「ノリスケ！お前は当分出入り禁止だ！」「アイエエエ……」しばらくご馳走が食べられなくなり、うなだれるノリスケ　、インガオホー！

一方その頃

アサヒ・ヒル・ステーション前のメインストリートを一台の脱法改造デリバリー・バ

イクが駆ける、運転するライダーの眼はマグロめいているがフルフェイス・ヘルメットなので表情はうかがえない、車体には疾走感溢れる書体で「ミ」「カ」「ワ」「ヤ」「！」

ミカワヤとはネオサイタマで古くから酒や薬の販売を行っているメガコーポであり、近年はデリバリー・バイクによる年中無休２４時間配達で人気を博している、また過酷な勤務形態だが宅配速度や件数によるインセンティブも大きく若者にも人気な職場である。

バイクに通信が来た、「ドーモ、コチラ、デリバリー本部、１０１号ドーゾ」感情を感じさせないオペレータの声がヘルメットに響く。

「ドーモ、コチラ、配送車１０１号、本部ドーゾ」自分の声も機械めいて平坦な事にドライバーは苦笑する。

「先程、注文が入りまして、ケモビール、大ビン６本です」「ケモビール大ビン６本、ヨロコンデー」「お届け先はアサヒ・ヒル　サンチョーム１０バンチ、イソノ様です」「アサヒ・ヒル　サンチョーム１０バンチ、イソノ様、ヨロコンデー」機械めいて復唱、（（お

得意様だ、目隠ししても行ける！））

バイクを路肩に止めてドライバーは一本のアンプルを取り出し、中身を一気に飲み込む、マグロめいた眼に不自然な活力が宿る。

（（やってやる……やってやるぜ！））全身に高揚感、多幸感をたぎらせ、バイクは急発進する。

極彩色のネオンサインが七色の流星に見える、世界を手にしたかのような万能感！バイクは更に速度を上げ時速１００ｋｍを越えた、その時である！

バイクを後方から何者かが抜き去る、ドライバー、薬品で理性を失っているサブチャンは激怒した！「ザッケンナーコラァ！アイサツシロッ！コラァ！」バイクの速度を更に上げる、１０ｍ…５ｍ…距離が縮まる、３ｍ…２ｍ……１ｍ…並んだ！

自分を抜き去った何者かとサブチャンの視線が合う、「アッ……アイエエエ！」恐怖！サブチャンのニューロンに満ちていた多幸感も万能感もあっさりと消え去り残ったモ

ノは圧倒的恐怖！

サブチャンはようやく理解した、目の前の存在が何者かを、「ニンジャ……」震えた舌から、喉から絞り出したかの様に呟く。

そう、ニンジャだ！平安時代の日本をカラテによって支配した半神的存在、ニンジャがサブチャンの前に姿を現したのである！

ニンジャの眼光が鋭さを増す、「アイエエエッ！アイエエエッ！」サブチャンは嘔吐と失禁、ＮＲＳ（ニンジャリアリティショック）だ！ハンドルを切り損ねバイクが転倒した。

「ヒィーッ！ヒィーッ！タスケテ！」バイクを捨てあらぬ方向へ逃げ出すサブチャン、ニンジャは冷ややかに一瞥《いちべつ》すると闇に消えた……その後ろをミケネコが見つめる。

＃８　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃８　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

イソノ家

家族全員が揃った食卓、チャブ・テーブルにはスキヤキが並び、温かな一家団欒《だんらん》のひととき、しかし食卓はつい先程迄の談笑は消え失せ、オツヤ・リチュアルめいた沈黙が支配していた、咀嚼音、食器の音がのみがお茶の間に響く。

怒りが未だ収まらぬナミヘイ、顔を見合わせるフネとサザエ、マスオは奥ゆかしく何も語らない、子供達は俯《うつむ》いている。

「テ……テレビでもつけようかしら?」サザエがテレビをつけた、しかし番組はどの局も報道番組だけだった。

ピッ！（本日、１２時２５分頃、湾岸工業地帯で爆発があり、警察はイッキ・ウチコワシとの関連を……）

ピッ！（マーダー・タケノコ・ヤクザクランとヘル・キノコ・ヤクザクランの抗争は

激しさを増し、近隣の住民は不安を訴え……）ピッ！（キョートパブリックのガイオン中央拘置所に拘置中のゴトー・ボリス容疑者に対しＮＳＴＶは独占取材を……）サザエは無言でテレビを消した、ろくなニュースが無い、少なくともお茶の間が明るくなるニュースでは無いだろう、「……今日はサブチャンは遅いねぇ？」フネが呟く、「そう言えば…」いつもなら注文を入れたら４～５分くらいで商品が届くのに今日はどうしたのだろう？サザエはいぶかしんだ。

一方その頃

オムラ・ホームテック本社

同、極秘作戦発令室

オムラ・ホームテック地下１７階にそれは有った、秘密めいた出入口には重厚な防爆トビラ、網膜、指紋による認証システム、「安全は保証できない」「外して保持」「無警告射撃」等……威圧的な警告メッセージが表示されている。

内部には宇宙めいた暗闇が広がり、中央に巨大な戦略コタツ、周囲を取り囲む様に最新型のＵＮＩＸが並び、ＬＡＮ直結したオペレータが無言で各々の作業に取り組む、そして厳しい視線で戦略コタツに据え付けられた巨大モニターを見つめるのはスティーブンス・オムラ、オムラ・ホームテックの若きＣＥＯである。

モニターには幾つものウィンドウが表示され、イソノ家に関するあらゆる情報が表示されている、スティーブンスは既に購入者、イソノ・ナミヘイが只のサラリマンだとは微塵も思っては居ない、ハッカーを使って入手した情報は恐るべきモノだった。

なるほど、イソノ・ナミヘイは只のサラリマンだ、メガコーポのカチグミ社員では無い、婿のフグタ・マスオもだ。

しかし、イソノ・ナミヘイの勤務するヤマカワ・ショージはオムラ・ホームテックのライバル企業、トウチバと取引があるのだ！

そして驚くべき事にフグタ・マスオの勤務するシー・アンド・マウンテン・コーポレーションもトウチバと取引があるのだ！これは只の偶然だろうか！

スティーブンスの明晰な頭脳はついに答えを出した、今迄の想定がそもそもの間違いだったと。

つまり同業のメガコーポでは無く、メガコーポと取引がある中堅コーポによる妨害、ヤマカワ・ショージ又はシー・アンド・マウンテン・コーポレーションによるものだと。

そしてその作戦の尖兵がイソノ家だ、イソノ家の誰かがニンジャに違いない、スティーブンスのメガネが光る！

そしてこの作戦が成功したあかつきには、オムラの技術を入手したトウチバが株価をV字回復させ、なんだかんだでヤマカワ・ショージやシー・アンド・マウンテン・コーポレーションも大きく業績を伸ばす事だろう、技術流出を軽視した自分のなんとウカツな事か！

だが……だが挽回のチャンスは残っている、タマゴ割り機の奪還、又は破壊する今回の作戦に

あたってフリーランスのニンジャと契約する事に成功したのだ。

オムラ本社やソウカイヤに対する不信感から独自にニンジャとの接触を試みたスティーブンス、だがその結果は思わしいものではなかった。

一流と呼ばれるニンジャは既に別件の契約が入っているか、そもそも交渉ルートを持っていない為、交渉自体出来なかった。

笑い爺なるサイバーツジギリの斡旋者とも連絡を取ったが、コチラはシルバーカラスとか言うニンジャが所属ニンジャを数名殺害してしまい、当分仕事は受けられないと不機嫌そうに語っていた。

そんな中、一人のニンジャと契約を結ぶ事に成功した、ピックポケットと言う常人の三倍の脚力を誇る驚異的なニンジャだ、彼ならば今回のミッションを成功させるだろう。

オペレータが告げる、「社長、ピックポケット＝サンが間もなく目的地に到着、目標と

交戦します」無言でうなずくスティーブンス。

（（頼んだぞ、ピックポケット＝サン））　スティーブンスは作戦の成功を祈る。

再びイソノ家

食事を終えてサザエとフネが食器の片付けを始めようとした時、それは現れた、その男は物音も立てずイソノ家の人々の前に立つ。

灰色のニンジャ装束に同色の塗装が施された金属製メンポ（訳注・面頬）で口もとを覆う、その男は両手を合わせオジギをする。

「ドーモ、イソノ家の皆さん、初めましてピックポケットです」頭をあげたピックポケットの眼光には冷たく鋭い殺気が宿る。

「アイエエエッ！ニンジャナンデ?!」「コワイ！」「コワイデスー！」突然のニンジャの出現に子供達がＮＲＳ（ニンジャリアリティショック）を起こし失神する、そしてピック

ポケットの視線を真っ正面から受けたナミヘイ、フネ、マスオもＮＲＳを起こし次々と失禁そして失神する。

「ドウシヨ!ドウシヨ!…ケイサツ!そうだ警察を呼ばないと!」混乱し部屋をグルグルと回り続けるサザエ、そんなサザエを余所に一匹のシロネコが部屋の隅から歩み出た、イソノ家の飼いネコ、タマである、そしてピックポケットの前で二足直立すると両前足を合わせオジギをした『ドーモ、初めましてピックポケット＝サン、ヴェータラです」タマのヒゲや口もとの体毛が硬化し、金属めいた光沢を発するメンポとなった。

読者の皆さんの中にはネコのニンジャの存在をいぶかしむ方もいるだろう、だがネコ・ニンジャの存在は古くから世界各地の神話や民話、伝承で確認されている。

古代エジプト・ニンジャ文明においてはネコの頭を持つ女神バステトは強大なカラテを誇るメスのネコ・ニンジャだと言う説が有力であり、ネコが神聖視されていたと言う事実がそれを裏打ちしている。

日本においてはエド時代に日本の辺境地帯、サガ・プリファクチャーを支配したダイ

ミョ、ナベスマ氏を苦しめたバケネコ・ニンジャなど古くからネコ・ニンジャは人類の歴史の影で暗躍してきたのである、しかし、この恐るべきニンジャ真実を知る者は少ない。

「アイエエエ……タマッ！タマタマ…タマがニンジャ……ウーン」サザエも失神、そして失禁！

ヴェータラがピックポケットに語りかける、「一体何の様だ、アンタもどこぞのハイエナのごとくスキヤキでも食らいにきたか、だが残念だったな、肉はもう無いぞ」皮肉な笑みを浮かべ、ピックポケットを嘲笑する。

「……ターゲットが自分から名乗り出てくれて助かるぜ、まぁこの家の連中は全員殺すがな」ピックポケットはアイクチ・ダガーを構える。

ヴェータラの顔から皮肉めいた笑みが消える、『イヤーッ！』「イヤーッ！」平和な食卓はサツバツとしたニンジャのイクサの舞台と化す、両者同時に突進、ピックポケットは鋭いナイフ突きを繰り出す、ヴェータラは右ステップ回避！「イヤーッ！」ピックポ

ケットは鋭いナイフ突きを繰り出す、ヴェータラは左ステップ回避！

ピックポケットの眼前にヴェータラが迫る、だがそれもピックポケットには想定通り、アイクチ・ダガーによる刺突はフェイク、本命は正面へのケリ・キック、常人の三倍の脚力から繰り出される恐るべき一撃がヴェータラに迫る！

だが…だが、おお、ヴェータラの姿が消えた！何処に……天井だ！涼しげな鈴の音を残し跳躍、空中で体勢を１８０。入れ替える、天井を蹴りあげ、ピックポケットに突進！

『イヤーッ！』「グワーッ！」ピックポケットの右肩から鮮血が迸る！ヴェータラは空中３回転、体勢を１８０。入れ替える、壁を蹴りあげ、ピックポケットに突進！

『イヤーッ！』「グワーッ！」ピックポケットの左脇腹から鮮血が迸る！ヴェータラは空中３回転、体勢を１８０。入れ替える、柱を蹴りあげ、ピックポケットに突進！

ヴェータラの動きが壁を、天井を、柱を蹴りあげる度、乗算的に速くなる、最早、並

みのニンジャ動体視力ではその動きを捉える事は困難だ！ピックポケットのニューロンにジリー・プアー（訳注・徐々に不利）の言葉が浮かぶ。

状況を打開すべく、ピックポケットも反撃を試みる、「イヤーッ！」アイクチ・ダガーを左上から右下へ袈裟がけに振るう、ヴェータラは空中３回転、攻撃を回避！アイクチは空しく虚空を切り裂く。

「イヤーッ！」今度は左下から右上へ逆袈裟に振るう、ヴェータラは空中３回転、攻撃を回避！アイクチは空しく虚空を切り裂く。

「イヤーッ！」「イヤーッ！」「イヤーッ！」「イヤーッ！」ピックポケットは立て続けにアイクチ・ダガーを振るうが、ヴェータラは悉く回避！その口元には皮肉めいた笑みが浮かぶ。

『やれやれ、世の中には珍妙なカラテがあるものだ』「イヤーッ！」『ここまで攻撃を外すというのも逆に感心するな』「イヤーッ！」『おっと、怒ったか？怒ったのか？』

ピックポケットが攻撃を外す度にヴェータラがそのワザマエを嘲笑する、そして見よ！ピックポケットの攻撃が目に見えて単調になっているではないか　、彼はヴェータラの挑発的発言に冷静さを失ってしまったのだ。

ニンジャのカラテは拳を、蹴りを、武器をぶつけ合うだけでは無い、言葉をぶつけ相手の精神を揺さぶる事もカラテなのだ！

『やれやれ、今度はオレが手本を見せてやる、イヤーッ！』ヴェータラはピックポケットめがけ跳躍！鋭い斬撃を立て続けに繰り出す。

『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』『イヤーッ！』

「グワーッ！」一瞬の内にピックポケットの全身が切り刻まれ、灰色だった彼のニンジャ装束は真っ赤に染め上げられた。

ヴェータラは何処に?……彼の姿が見えない、彼の姿は……おお、見よ!ヴェータラの姿はピックポケットの頭上にあった、直立仁王立ちでピックポケットの頭上だ!おお、ゴウランガ!

そしてヴェータラは手元で何かを弄んでいた、それは……ナムアミダブツ!抉り取られたピックポケットの眼球ではないか!ヴェータラは一頻《ひとしき》り弄ぶと無造作に投げ捨てた。

室内には静寂が広がり、何処かで運転するバイクのエンジン音だけが響く。

＃9　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃9　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

ヴェータラは抉り取ったピックポケットの眼球を無造作に放り捨てると、ピックポケットの頭上から飛び降りた、傍らで顔面を押さえ踞《うずくま》るピックポケットに『どうする？ピックポケット＝サン、まだやるかい？』皮肉めいた笑みを浮かべ問いかけた。

「グワーッ！グワーッ！」右目を押さえ悶絶するピックポケット、指の間から鮮血が止めどなく溢れる、彼の胸中に込み上げる感情は何であろうか、畏怖？恐怖？否！ピックポケットの残された左目を見よ！その目は世界の全てを呪うが如く狂気めいて血走る！

ピックポケットのカラテのワザマエはサンシタレベル、傷は実際重篤で速やかに処置しなければオタッシャ重点、ヴェータラは己の勝利を確信する、だが……だがその判断は余りにもウカツ！

その狂気に満ちた眼光はヴェータラの立ち位置からは窺う事はできない、もし彼がそ

の眼光を目にしたのならば即座にカイシャクしただろう。

（チクショウ！チクショウ！舐めやがって！クソッ！クソッ！クソッ！）ピックポケットのニューロンに憤怒、そして憎悪が満ちる。

ピックポケットは実際サンシタでカラテは未熟、ユニーク・ジツを持っている訳でも全身を重サイバネ化した訳でもズンビー化した訳でも無い、だがニンジャなのだ！ニンジャ同士のイクサなのだ！

永きに渡るニンジャの歴史はすなわちイクサの歴史と言っても過言では無い、そしてその中には力量差を瞬間の状況判断や機転、事前の準備といったいわゆるフーリンカザンによって覆した事例は幾つも存在する、そして油断した者、慢心した者が勝てる程ニンジャのイクサは甘くは無い！

そしてヴェータラは知らなかった、追い詰められヤバレカバレになった者の取る行動がいかに危険かを。

極限のイクサの中ピックポケットのニューロンにニンジャアドレナリンが迸る！爆発する様な感情はそのままに思考がクリアになり集中力が研ぎ澄まされる、全身の痛みはいつの間にか消えていた。

局面を打開すべく周囲の状況把握に努める、依頼を達成しつつ自分が無事に脱出し目の前のクソネコに一泡吹かせるには……沈思黙考し残された左目で周囲を見回す。

オチャノマはショージや壁に穴が空き、チャブ・テーブルはひっくり返り上に乗っていた鍋や食器はあちこちに散乱、そして床にはイソノ家の人びとが気を失いマグロめいて倒れている。

ピックポケットのニューロンに悪魔めいた邪悪な発想が浮かぶ、そして前方回転跳躍！ヴェータラの一瞬の隙を突き部屋の隅に跳ぶ、そして立ち上がったその左手に掴まれているのはナ……ナムサン！タラオではないか！

『なっ…！テメエェェ……！』込み上げる怒り、そして後悔、だが全て遅いイクサの流れは１８０度変わってしまったのだ、タラオの命はピックポケットの手の内にある。

「さんざん舐めた真似しやがって……エェ?……スッゾコラァ……」タラオの首根っこを掴みヴェータラに見せつける。

((クソッタレ!……なんてウカツ!バカ!間抜け!))ヴェータラは自らを罵る、ミヤモト・マサシがこの場に居たのなら「調子に乗っている奴から負ける」と嘆息交じりに語る事だろう。

「イヤーッ!」ピックポケットがスリケンを投擲!狙いは……タマゴ割り機だ!命中!スリケンが機体を貫通、バチバチと火花が飛び散る。

「…タマ…タマタマゴを割り?割りワリママママースドードドスエェー!」ＬＥＤが激しく点滅!そして爆発!

((……まずは１つ))最低限の仕事はした、結果的にはタマゴ割り機の回収は出来なかった為インセンティブは若干下がるが任務を失敗するより余程マシである、後はイソノ家の連中を始末するのみだ、その為には確保した人質を活用しクソネコを痛め付け、殺す、

彼は冷静だ！

クソネコを殺せば後はやりたい放題だ、ピックポケットの視線がワカメに向かい口元に好色な笑みが浮かぶ（……サヨナラする前に前後するのもイイな、いっその事アジトに連れて帰るのもありかも……ウィヒッ！役得！役得！）ナムアミダブツ！彼は冷静だ！

静寂の中、バイクの音のみが耳に響く。

ヴェータラのニューロンにはニンジャ判断力によって既に最適解が出ていた、血の通わぬ機械めいた冷徹な答えである、（……タラオを見捨てピックポケットを殺すべし、このままでは自分は死にイソノ家全員が殺される、小を捨て大をとるべし）

適切な答えだ、これ以上無い適切な答えだ、現状自分には打つ手は無い、自分が飛び掛かると同時にピックポケットはタラオを縊《くび》り殺すであろう、連続トライアングルリープでトップスピードに乗れば奴は反応できないがその隙が無い。

では他の手段は……自分のジツを使えばピックポケットの隙を突ける……だが自分のユニーク・ジツに発動迄に隙が出来る、1秒から2秒程度だがニンジャ同士のイクサでは致命的な隙である。

やはりタラオを見捨てるしか無いのか……だが…ヴェータラのニューロンにタラオが産まれた日の事が思い出される。

初孫の誕生を喜ぶナミヘイとフネ、ナミヘイは孫の話を一日中続けイササカ先生をゲンナリさせ、フネは気の早い事に進学や就職、結婚の心配をイササカ先生の奥さんで親友のオケイ=サンに語っていた、早く赤ちゃんに野球を教えたいとはしゃぐカツオ、オバサンになると聞いてショックを受けるワカメ。

初めての出産に珍しく気弱になるサザエ、そんな彼女の手を取り励ますマスオ……あの日以来騒がしかったイソノ家は更に騒がしくなった、子供3人の笑い声、それに連れられ一緒に笑うナミヘイ、フネ、サザエ、マスオ……本当に騒がしい、おちおち昼寝もできない……だが心地の良い空間だ。

……タラオにもしもの事があれば、死ななくとも重篤な怪我をしてしまえば失われてしまうのだ、あの心地の良い一時が！イソノ家の人びとは心から笑える事は二度と無いだろう。

ヴェータラの思考は既にニンジャの思考では無い、感傷にまみれた只のネコの思考である、この瞬間はニンジャ、ヴェータラではなくイソノ家の飼いネコ、タマに戻っていた。

（オレは……オレは…『グワーッ！』思考は脇腹への衝撃で中断される、「…ツゾコァ！」ピックポケットのケリ・キックが炸裂したのだ、ヴェータラの体がサッカーボールめいて飛び壁に叩きつけられる。

「よそ見とは余裕だな、ソマシャッテコラー！」ヴェータラににじり寄るピックポケット、顔には凶悪な笑みが浮かぶ。

（（オレは諦めない、死なない！タラオは助け出す！家族の誰も死なせない！））覚悟は決まった、後はひたすら耐えて一瞬の好機を待つのみ、ヴェータラは全身にカラテを漲《み

なぎ》らせる。

「ザッケンナコラー!」「スッゾコラー!」「ナマッコラー!」威圧的なヤクザスラングを発しケリ・キックやストンピングを次々に繰り出すピックポケット、「グワーッ!」「グワーッ!」「グワーッ!」耐えるヴェータラ。

「スッゾスッゾスッゾコラー!」威圧的なヤクザスラングを発しケリ・キックやストンピングを次々に繰り出すピックポケット、「グワーッ!」「グワーッ!」「グワーッ!」耐えるヴェータラ。

「スッゾ・スッゾ・スッゾ・スッゾ・コラー!」威圧的なヤクザスラングを発しケリ・キックやストンピングを次々に繰り出すピックポケット、「グワーッ!」「グワーッ!」「グワーッ!」「グワーッ!」耐えるヴェータラ。

カラテを体に漲らせ攻撃を耐えるヴェータラ、攻撃をギリギリで見切り直撃を避ける、だがダメージは確実に蓄積している!

（クッ！このままでは……）ダメージが無視できないレベルで蓄積している、骨は何本か折れ呼吸をする度に激しい痛みが襲う、このままではジツを繰り出す前に爆発四散する恐れがある！

ヴェータラはジツの行使を決意する、その時である！

イソノ家に向かって爆走する一台の配達バイク！車体には疾走感溢れる書体で「ミ」「カ」「ワ」「ヤ」「！」ライダーとしてプライドを傷つけられたサブチャンがリベンジマッチを挑みに来たのか！

いや違う！ライダーが着ているのはミカワヤの作業着では無い！彼が着ているのは赤黒！赤黒のニンジャ装束だ！バイクは更に加速！だがこのままでは塀にぶつかる！アブナイ！

だがバイクは衝突しなかった！塀の直前で大跳躍！「Ｗａｓｓｙｏｉ！」イソノ家の庭に見事着地、ワザマエ！

月明かりが赤黒のニンジャ装束と威圧的なミンチョ体が刻まれた「忍」「殺」のメンポを照らす、そのニンジャはヴェータラとピックポケットに静かな口調で、しかし全身が凍りつく様な殺気を漂わせアイサツをする。

「ドーモ、初めましてニンジャスレイヤーです」ニンジャスレイヤーの眼光がニンジャ達を見据えた。

＃１０　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンションに続く

＃１０　ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション

「ドーモ、初めましてニンジャスレイヤーです」突如現れた赤黒のニンジャ、月明かりが「忍」「殺」のメンポを照らし、先程迄の喧騒は消え失せ静寂がその場を支配する、全身から只ならぬ殺意を漲らせジゴクめいた声が響く。

ヴェータラ、ピックポケット、両者共にそのニンジャの存在は知っていた、それはここ最近ネオサイタマの裏社会で囁かれるようになったアーバン・レジェンドめいた存在。

曰く、ソウカイシンジケートにたった一人で無謀な戦いを挑む狂人。
曰く、ニンジャを拷問し惨たらしく殺す異常者。
曰く、神出鬼没の死神。
曰く、凄まじいワザマエを持つカラテモンスター。

ニンジャスレイヤーが発するただならぬ殺気を浴びながらヴェータラとピックポ

ケットはニンジャスレイヤーにアイサツを返す。

『…ドーモ、ニンジャ…スレイヤー……＝サン、ヴェー…タラです』苦し気にアイサツを返すヴェータラ、左前足は不自然な角度に曲がり口元は血で汚れている（オムラの刺客の次はネオサイタマの死神のご登場か…まったく何て夜だ……）「ドーモ、ニンジャスレイヤー＝サン、ピックポケットです」（ニンジャスレイヤーだって?! 聞いてないぞ！冗談じゃ無い！）両者それぞれの思惑を胸に三者が対峙する、奇妙な静寂、事態はトライアングル・トモエめいた膠着状態に入る。

ニンジャスレイヤーはアイサツを返した二忍を見据え、ヴェータラと名乗ったネコのニンジャに視線をやる、（ネコの……ニンジャ！）（センセイからニンジャアニマルの存在を聞いた事はあるが本当に会話が出来るとは……）ヴェータラと名乗ったニンジャは鋭い眼差しでニンジャスレイヤーを見つめている、満身創痍だが戦意は衰えてはいない、どうやらコチラを警戒しているようだ。

そしてニンジャスレイヤーはもう一人のニンジャ、ピックポケットの様子を窺う、コチラも満身創痍、全身がキャベツの千切りめいて切り刻まれ、流血により元のニンジャ

装束がどのような色かさえ判別できない、右の眼球は抉り取られ虚ろな眼窩から血が流れ続けている、残された左目は恐怖の為か視線が定まっていない、そして…そして、その左手は幼子の首根っこを乱暴に掴んで離さない、子供の年齢は３～４歳ぐらいか。

（（トチノキ……））ニンジャスレイヤーは死んでしまった我が子を思い起こす、（（守れなかった……身代わりになる事さえ出来なかった！））ニンジャスレイヤーの胸中に後悔、無念、悲嘆、絶望、あらゆる負の感情が巻き起こる。

そして視線の先、ピックポケットが居座るお茶の間は、失神したイソノ家の人々がマグロめいて倒れ夕食の最中だったのだろう、食器や鍋、チャブ・テーブルは倒れ家具類も破壊されている、笑顔が絶えなかったであろう一家団欒のひとときはニンジャによって無残に蹂躙されたのだ！

この光景はニンジャの暴威にモータルが蹂躙されるネオサイタマの縮図と言っても良いだろう、（（フユコ…トチノキ……））ニンジャスレイヤーの脳裏に浮かぶものは平凡な、そして温かく幸せなフジキド家の食卓であった、たしかにカチグミの食卓のように贅沢な食事ではない、しかし誰よりも幸福であると胸を張って言える穏やかな時間、だ

がそれは永遠に喪われた、奪われたのだ！ニンジャによって！

誰が知るだろうか、ネオサイタマの裏社会で死神の異名で恐れられている男が一年前迄は只のサラリマンであった事を、自らの全てを投げ捨て強大なソウカイシンジケート相手に過酷な戦いを続けている事を！

（ニンジャ…！ニンジャがフユコとトチノキを！）ニンジャスレイヤーのニューロンをドス黒い憎悪と殺意が満たす。

（そうだ、ニンジャがオヌシの妻子を奪ったのだ、ニンジャ殺すべし）そしてニンジャスレイヤーのニューロンに囁きかける邪悪な存在あり、ナラク・ニンジャだ、古事記にも記されず、フジキドの師であるドラゴン・ゲンドーソーもその正体を掴めなかった謎のニンジャソウルである。

復讐を手伝うと嘯きニンジャとしてのチカラを与えた存在ではあるが、実際のところ彼をジョルリ人形めいて好き勝手に操り使い潰そうとする油断ならぬ相手である。

そしてニンジャを殺す為には一般市民を巻き込む事を厭わない、自分の目的の為なら他者を踏みにじり平然としている、ある意味典型的なニンジャと言っても過言では無いだろう。

故にニンジャスレイヤーは、フジキド・ケンジはナラクに決して心を許さない、（（ググググ……両者既に死に体とは……手間が省けたものよ、まさにアブハチトラズと言うもの））（フジキドよ、先ずはそこのネコ・ニンジャから殺すのだ、彼奴の動きは実際機敏、体力を回復すれば少々てこずろうぞ））（ピックポケットなるサンシタはとるに足らぬゲニンのソウルよ、ヴェータラとやらを殺した後、好きに料理するが良い……グググ……愉快、愉快））ナラク・ニンジャは愉しげに嗤う。

（（黙れ！ナラク！））ニンジャスレイヤーはナラクからの呼び掛けを拒絶する、（（誰を殺すか、誰から殺すかは私が決める、オヌシの指図は受けん！））

ニンジャスレイヤーからの拒絶にナラクは（（なんたる慢心！なんたる増上慢！……まあ良い、サンシタ二匹に遅れをとるオヌシではあるまい、好きにせよ））そう言い捨てナラクは沈黙する。

ニンジャスレイヤーは殺意と憎悪に満ちた眼差しでピックポケットを睨み付ける、「まっ…待ってくれ!ニンジャスレイヤー=サン、 俺はアンタとやり合うつもりは無い!」慌てた様子でニンジャスレイヤーに語りかけるピックポケット。

「待てとは一体何を待つのだ?オヌシの下劣な品性で詠み上げるハイクでも待てと言うのか、生憎だがオヌシの都合に付き合う筋合いは私には無い」ニンジャスレイヤーは無慈悲にいい放つ、「アイエエエ……」ピックポケットは一歩後ずさる。

「それに私と戦う気は無いと言ったな、ならば速やかにセプクせよ、カイシャクはしてやる」赤黒の死神は間合いをつめる。

「ナンデ?!俺が一体何をした!何で俺を殺そうとする!」悲痛な叫びに「知れた事を 、オヌシがニンジャだからだ、ニンジャ殺すべし慈悲はない」ジゴクめいた声で無情に告げられる言葉に「アイエエエ…」ピックポケットは一歩後ずさる。

「そ……そうだ、ニンジャスレイヤー=サン、俺は今とあるメガコーポから仕事の依頼を

受けてここにいる、結構な成功報酬だ、もし見逃してくれるのなら報酬の半分…い、いや！全額渡そう！」ピックポケットはニンジャスレイヤーの籠絡を試みる。

ニンジャスレイヤーはその申し入れを一笑に付し、「そのメガコーポとやらはオムラ・インダストリの子会社オムラ・ホームテックか、そこが販売したポンコツ機械の回収と購入者の抹殺が任務だったな、だが回収で無く破壊では思うような報酬は得られまい」赤黒の死神は間合いをつめる。

「何よりその任務とやらも失敗に終わる、私がオヌシを殺すからだ」「アイエエエ…」ピックポケットは一歩後ずさる。

……

その様子をヴェータラは息を潜め窺う、ニンジャスレイヤーとピックポケットが対峙するこの状況は天の助けと言っても良い、ヴェータラは体力を回復しカラテを練る貴重な時間を得たのだ、（（待ってろボウズ、今助けてやるからな！））ピックポケットに捕らえられたタラオを見つめ、その時を待つ。

ニンジャスレイヤーとピックポケットのやり取りは続く、「落ち着いてくれニンジャスレイヤー＝サン、確かに報酬は減ったがそれでも結構な大金だ、これだけ有ればしばらく上等なサケやオイランが楽しめるぞ！そうだ、そこのオンナも連れて行くと良い、好きなだけ弄(もてあそ)んだら非合法オイラン・ホテルにでも売り飛ばせばいい！」サザエを指差し叫ぶ、ピックポケットは必死である、彼は怖れたのだ！ニンジャスレイヤーの殺気を！狂気を！憎悪を！

彼の頭からはこの場を逃げ去るという選択肢は既に無くなっていた、任務への責任感では無い、報酬への未練でもない、彼のニンジャ第六感は逃げても無駄だと無情にも告げていた、只それだけである、まさに「敵前のスモトリ、ドヒョウ・リングを踏まず」とでも言うべき状況だ。

「落ち着けだと？私は十分落ち着いているが？オヌシをどの様に痛め付け、殺すか思案しているのだ、耳障りな命乞いはやめろ、気が散るのでな」赤黒の死神は間合いをつめる。

「ニ…ニンジャスレイヤー＝サン、アンタ程のカラテが有ればカネもオンナも思いのままだ！ダイミョみたいな生活ができるぞ！」ピックポケットは一歩後ずさりながら叫ぶ。

「ソウカイヤと揉めているんだろ！もしネオサイタマに居づらかったらキョート・リパブリックかオキナワにでも行くといい……そうだ、俺がアンタのマネジメントをしよう！俺にはコネクションがあるんだ！」ピックポケットは一歩後ずさりながら叫ぶ。

「私の心配をしてくれるとはずいぶんと余裕だな、だがその前に自分の心配をするが良い、これからオヌシが行く先はジゴクだ、聞くところによるとジゴクにも色々あるらしい……ハリ・ジゴク、ブラッド・プール・ジゴク、アビ・インフェルノ・ジゴク……好きなジゴクに落ちるが良い、私にはコネクションがあるからな」赤黒の死神は間合いをつめる。

「……な……なぁ、ニンジャスレイヤー＝サン、何を必死になっているんだよ…コイツらは只のサラリマンの一家だろ、助けたところでカネにはならない、そうだろ？所詮（しょせん）カネもチカラも無いモータルだ、俺たちの……アイエッ！」ピックポケットは最後まで言葉

を発する事はできなかった、ニンジャスレイヤーの殺気が一段と高まったのを感じ取った為である。

「チカラの無いモータルが何だと……」ニンジャスレイヤーがジゴクめいた声を発する、否、ジゴクめいた声だがその温度はブリザードめいた冷たさだ。

「無力なモータルを踏みにじりライオン気取りか、笑わせるな、オヌシはライオンに非ず(あら)モータルの生き血をすするしか能の無い薄汚い寄生虫よ」ニンジャスレイヤーはジュー・ジツの構えをとりピックポケットに告げる、「これ以上オヌシの下らぬ戯れ言に付き合うつもりは無し」その眼光が鋭さを増しピックポケットを睨み付ける、「ハイクを読め、そして死ね」

「アイエエエッ!」ピックポケットは一歩後ずさる……事はできなかった、いつの間にか壁を背にしていたのである、「アイエッ!」驚愕し、動きが止まるピックポケット、そしてこの瞬間を待っていたニンジャがいた!ヴェータラだ!

『イヤーッ!』ヴェータラは体内に巡らせたカラテ念動力を解き放つ!次の瞬間、壁を崩

し何者かが姿を現す、それは……ナムアミダブツ！先日殺害されたオムラのヤクザ・サラリマンではないか！

「アバー」白目を剥き、引き裂かれた喉からゴボゴボとバイオ血液が吹き上げピックポケットに掴みかかる、コワイ！

読者の皆さんは何故オムラのヤクザ・サラリマンがピックポケットに掴みかかるのか、あからさまに死体である存在が何故動くのか疑問をお持ちの方も多いと思われる、先ずはその疑問を解消したい。

読者の皆さんの中にニンジャ記憶力をお持ちの方がいればオムラ・ホームテックが送り出した顧客対応班１０名が全滅した事は覚えておいでだろう。

そして賢明なる読者の皆さんは顧客対応班が全滅した現場を調べていた男がフジキド・ケンジ、すなわちニンジャスレイヤーである事をお気づきだろう、彼が目撃したヤクザ・サラリマンの死体は９体、では残りの１体は？

その謎を明かすにはヴェータラのニンジャソウル由来のユニーク・ジツ「クグツ・ジツ」の説明をしなければならない。

クグツ・ジツとは己のカラテ粒子をカラテ念動力に変換、対象者をジョルリ人形めいたクグツとする恐るべきジツである。

クグツとなった者は痛みも疲労も感じる事無く術者の意のままに動くズンビーめいた存在となってしまう、そして肉体の限界をこえた恐るべき怪力と俊敏さ、耐久力を発揮するのだ。

ヴェータラはヤクザ・サラリマン達を殺害した後、このジツを使い有事に備え1体だけイソノ家に持ち帰り床下に待機させていたのだ。

しかし、このクグツ・ジツは実際使い勝手が良いとは言えない、発動には幾つかの条件があり、隙が大きく術者のカラテ粒子を十分高めなければならない、又、対象者は生命活動を停止しているか意識を失った状態である事、頭部が破壊されていない事などがある。

対象者がニンジャである場合、死体であっても操る事はできず、そして何よりの難点は一度に操る事が出来るのは1体だけだということである。

（ちなみにヴェータラのニンジャソウルのオリジンは一度に数十体の死体をあやつり敵対ニンジャクランの拠点の前で踊らせ、相手を恐怖させた伝説があるが今回のエピソードには余り関係が無い為割愛させて頂く）

この様なジツの為、ヴェータラは只ひたすらカラテを高め、相手が隙を見せるのを待ち続けていたのである、そしてその忍耐は報われた。

壁を破壊してのアンブッシュにピックポケットは全く対応出来ない！そしてピックポケットの左腕をヤクザ・サラリマンが掴み……「グワーッ！」肉体の限界を超えた怪力で握り潰す！お茶の間にはヤクザ・サラリマンの指とピックポケットの腕が折れる音が同時に響く！

そして……おお、見よ！ピックポケットがタラオを取り落とすではないか！そして白

色の閃光がタラオの図上を掠め天井を直角に曲がり床に着地！ヴェータラだ！口元にはタラオを咥えている、ゴウランガ！だが……。

だがその代償は大きかった、左前脚が折れた不自然体勢での跳躍、咥えたタラオの重み、そして不自然な体勢での着地、ヴェータラの右前脚が悲鳴を上げ、屈した、『グワーッ！』その場に崩れ落ちるヴェータラ、そしてヴェータラに迫る死の手、「イヤーッ！」ピックポケットはスリケンを投てき！鮮血が迸(ほとばし)る！

ナムアミダブツ！ヴェータラは、タラオは無残に殺害されたのだろうか？

ピックポケットは呆然と目の前の光景を見ていた、ヴェータラでは無い、タラオでも無い、スリケンを握り鮮血を撒き散らしながら宙を舞う己の右腕である。

（クタバレ！クソネ……？…腕が…宙を……誰の？…死んで無い……俺の……腕が…ナンデ？）

引き延ばされた主観的時間の中ピックポケットは呆然と目の前の光景を見ていた、己の腕が突然切り飛ばされる事態に理解が追いつかないのだ。

だがその主観的時間は客観的には僅か０．１秒、ニンジャスレイヤーは決断的なチョップを降り下ろした後、勢いそのままにピックポケットの顔面を握り、締め付ける。

ガコッ！ガッ！メキメキ……！骨が砕ける音、金属製のメンポが歪む音が響く、メンポに出来た隙間からはゴボゴボと血の泡が吹き上がる、そしてニンジャスレイヤーの右手はもがき苦しむピックポケットの左胸に無慈悲に突き立てられた。

「ハイクを読め、ピックポケット＝サン」ニンジャスレイヤーの言葉が理解出来るのか出来ないのかピックポケットは酸欠状態のキンギョの様に口を動かすが、かすれ気味の呼吸音がこぼれるだけである、ニンジャスレイヤーは腕を引き抜くとピックポケットの体は操る者の無いジョルリ人形の様にむなしくその場に崩れ落ちる。

ニンジャスレイヤーは鮮血にまみれたピックポケットの心臓を無感動に一瞥（いちべつ）すると決断的に握り潰す、そして「サヨナラ！」ピックポケットは爆発四散した。

先程までの喧騒が嘘のように静まり返る、イクサは終わったのか？しかしニンジャス

レイヤー、ヴェータラ共にカラテ警戒を解いてはいない！両者にとってはイクサはまだ終わってはいないのだ！

（（なんてワザマエだ……））ヴェータラはニンジャスレイヤーのカラテに圧倒された、ピックポケットは一瞬で殺された、確かにピックポケットは深手を負ってはいたが仮に無傷の状態でも結果は変わらないだろう、せいぜい殺される迄の時間が０．１～０．２秒伸びる程度だ。

（（俺なら……））ヴェータラはニンジャスレイヤーとの戦闘をイメージするが、（（ダメだ、勝てる状況が思い浮かばない……））（（カラテの力量差は圧倒的、カラテ粒子は底を尽き、おまけに両前脚は折れているときた、もう笑うしかないな））ヴェータラは覚悟を決めた、自らの死の覚悟を。

（（奴の狙いはニンジャだ、俺が無闇に抵抗する方が却(かえ)って皆を巻き込む事になるだろう））ヴェータラは己のニューロン内で『家族』に別れを告げる。

ニンジャスレイヤーのニューロンに邪悪な哄笑(こうしょう)が響く、（（ググ…グググ……サンシタ

にふさわしい無様な死に様よ！愉快！実に愉快！最近オヌシらしからぬ振るまいが目立ってきたので懸念しておったが……安堵したぞ））ナラク・ニンジャがささやく。

（（グググ…次の獲物はネコ・ニンジャぞ……殺せ…殺すのだ……））ナラクに促されるかの様にニンジャスレイヤーはヴェータラに歩み寄る。

『早く来いよ、俺は気が短いんだ…気が変わっちまうだろうが……』ヴェータラのやけくそ気味の声、（（さあ…フジキドよ……殺せ…ニンジャを殺せ……））ニンジャスレイヤーのニューロンに響くナラクの声。

「オヌシは……」ニンジャスレイヤーはヴェータラに問いかける、「オヌシは何故ピックポケット＝サンと戦ったのだ？」ニンジャとは本来利己的な存在である、自らの欲望を優先し他者の犠牲を省みず恥じない忌むべき存在、今までに出会ったほぼ全て……自らの師であるドラゴン・ゲンドーソーやソウカイヤに追われる少女ニンジャといった極一部の例外を除き全てと言っても良いほどである。

そんな存在が両腕を折るほどの深手を負いサラリマン一家を守った？報酬も無しに

？もしやサラリマン一家を隠れ蓑に良からぬ策謀を練っているのでは……ニンジャスレイヤーが抱いた懸念はそこである。

『はぁ？』ニンジャスレイヤーの指摘にヴェータラは心底呆れたかの様な調子で返す、『あのな、ニンジャスレイヤー＝サン、家族を守るのに報酬を求めるってどんな守銭奴だと思っているんだよ』憮然とするヴェータラ。

「家族……」ニンジャスレイヤーは呟く、『ああ、そうだよ、俺にとっちゃ何より大事な存在なんだよ』ヴェータラの返事にニンジャスレイヤーは無言できびすを返す、『俺を殺さないのかニンジャスレイヤー＝サン』「オヌシがチカラに溺れ人びとに害を及ぼすようになれば殺す、それだけは心せよ、ヴェータラ＝サン」

（（待て！フジキド！奴を殺せ！殺すのだ！……おのれ腑抜けおって……））ナラクの声を無視し、ニンジャスレイヤーはピックポケットの生首を掴むと「Ｗａｓｓｈｏｉ！」大跳躍しネオサイタマの闇に消えた。

（（ニンジャスレイヤー＝サン、礼を言いそびれたな……））家族全員無事な事に安堵する

ヴェータラ、全身に疲労と倦怠感が一挙にのし掛かって来るのを感じた、（（もう寝よう……今日は正直疲れた……）ヴェータラは眠りに落ちた。

ダディ・イズ・マム・バイ・インベンション　　完

#1アビス・フィッシュ・カオス

ネオサイタマ市内ネオカブキチョ

ＰＭ１９：２５

眠らない街ネオサイタマ、一日の仕事を終えたサラリマン達は刹那的快楽を求め、重金属酸性雨降りしきる中、マグロめいた眼を欲望で血走らせ歓楽街に繰り出す。

「良心的な」「実際美味い酒と豊満なオイラン」「うまぴょい」極彩色のネオンサイン、電飾ボンボリやホログラフィック・ネブタ、店内から漏れ聴こえる猥雑なＢＧＭ「イラッシャイマセー！」「カワイイコがイルヨ！」「イッキ！イッキ！」「ヨイデハナイカ！」・・・・・・店員の呼び込みや酔客の喧噪、視覚、聴覚からの暴力的な刺激にサラリマン達は飲食店や風俗店に吸い込まれていく。

汚染され淀み濁りきった夜空は星一つ映さない、髑髏めいた月とメガコーポが運営す

るマグロツェッペリンが派手な電飾を明滅させその巨体を誇示する。

「安い！実際安い！」「ストレス発散！」「飲んで、歌って」大音量のＢＧＭと合成マイコ音声のアナウンスが人々の欲望を煽る、時折思い出したかの様に「飲み過ぎはキケン」「防犯重点」「悪質な店に注意」などと欺瞞的アナウンス、地上の極彩色の照明と競うかの様に派手なＬＥＤボンボリを明滅させ大型ディスプレイにはオムラインダストリやヨロシサン製薬などメガコーポのＣＭが繰り返し流されている。

黒、茶、灰色・・・サラリマンの濁流、呼び込みの店員、「ザッケンナコラー！どこ見て歩いてんだコラー！」「テメーがよそ見してたんだろうがアァ！」「誰に断って商売してンッダコラーッ!!事務所までツラかせや！」「アイエエエ！」酔っぱらい、ヤクザ、ヨタモノ……雑多な人々が大通りにひしめく。

大通りの喧噪とは反対に一歩裏通りに踏み込めばが危険なアトモスフィアが立ち込める、道端には違法薬物をオーバードーズした重篤な中毒者が座り込んでいる、その懐をホームレスが物色し財布を抜き取り立ち去った。

街灯の下、着飾ったオイランが客を引く、やたらと派手なその衣装はキョートのカチグミ階層に属する人びとが見れば眉をひそめる事だろう、泥酔した男にしなだれ掛かり、豊満な胸元を押し付け性的魅力をアピールする、男はイヤらしい笑みを浮かべ、オイランに誘われるがまま怪しげな店の中に消えた。

欲望渦巻くネオカブキチョにあってこの裏通り、通称「オヤフコウ・ストリート」はネオサイタマ屈指の危険地帯である。

建ち並ぶ違法建造物は増改築を繰り返し、もはや地元の人々ですら全容を把握するのは困難である、それらにはヤクザクランの拠点や非合法な物品をおおっぴらに取り扱う店舗、違法オイラン・バーやSMオスモウ・クラブが入居している。

「安心な」「ボッタクらないお店」「明るい会計です」…欺瞞的な文言がショドーされた蛍光看板が並ぶ、暗闇に浮かぶ極彩色の光は深海に潜むバイオアンコウが小魚を誘き寄せる為、頭部の発光器官を点滅させる姿を思わせる。

毎日の様に起こるヤクザランの抗争、サイコ犯罪者が起こすファック・アンド・サヨナラ・・・・・・弱肉強食のバンブージャングルめいた世界がそこには広がる、防犯啓発看板は何者かに踏み折られ、蛍光色のスプレーで「スゴイバカ」「ブッダファック」「前後前後、そして上下」口汚い罵詈雑言や卑猥なグラフィティの餌食になっている。

まともなニューロンならば好き好んでこの様な危険地帯に足を踏み込む事は無いだろう、しかし、薬物やアルコールで正常な判断力を失った人々は次々と怪しげな店に吸い込まれて行く、こうして新たな犠牲者が今夜も生まれるのだった。

そんな混沌と背徳、そして快楽に満たされた裏通りを闊歩（かっぽ）する男有り、シワ一つ無い上等な黒のスーツに身を包み、磨き上げられた高級なバイオ水牛の革靴、頭髪はサラリマンカットに整えられ、度の薄いメガネをかけた様子はどう見てもカチグミサラリマンである、一夜のスリルと快楽を求めこの裏通りに迷い混んだのであろうか？

否、男の服装こそサラリマンの姿だが身に纏（まと）う野獣めいた暴力的アトモスフィアはサラリマンのそれでは断じて無い！

そして・・・・・・おお見よ！スーツの襟元に光るエンブレムを！タケノコを思わせる戦闘的エンブレムは恐るべき武闘派ヤクザクラン「マーダー・タケノコ・ヤクザクラン」の物では無いか！

裏通りにひしめく群衆は波が引くかの様に道をあける、彼が放つリアルヤクザの威圧感が人々に道を譲らせたのだ、人々の動揺を意に介せず男は通りを闊歩する。

「ドーモ、タナカ＝サン、オツカレサマデス！」「オツカレサマデス！」人混みの中から声がかかる、マーダータケノコ支配下の無軌道学生やヨタモノ、飲食店従業員がオジギしたのだ、鷹揚に頷き男は歩む。

男の名はタナカ・ナカ、恐るべき武闘派ヤクザクラン、マーダー・タケノコ・ヤクザクランの若きグレーターヤクザだ、歩いて程なく目的地であるマーダー・タケノコの本部に到着した。

ネオカブキチョの一角にその建物はあった、無機質な強化コンクリートに覆われ窓枠

は小さく、窓ガラスは分厚い強化防弾ガラスが埋め込まれ外部から中の様子を窺い知る事は出来ない、多数の監視カメラが威圧的に設置され周辺をレッサーヤクザがたむろする、そして正面玄関にはタケノコを思わせる戦闘的なエンブレムと威圧的なミンチョ体フォントで「殺人竹之子一家」と威圧的にショドーされた看板が掲げられ、ただならない存在感を放っていた。

タナカは悠然と建物の中に入る、「「「「オツカレサマデス！」」」」クローンヤクザめいた一糸乱れぬオジギ！なんたる統制か！

正面ホール内は数々の高級な装飾品、「仁義」「任侠」「ソンケイが大事だ」等歴代の首領の直筆のショドーが並ぶ、中でも目を引くのは全長４ｍにもなる巨大なバイオパンダの剥製だ。

バイオパンダとは中国地方のバイオバンブー覆い繁る密林奥深くに生息する獰猛な生物である、鋼鉄の四倍の強度を誇るバイオバンブーを容易く引き裂く爪と牙、そして恐るべき腕力でタイガーを引き裂き喰らうのだ、コワイ！

この巨大なバイオパンダは江戸時代のレジェンドヤクザでありクランの創設者でもあるメイジ・セイカンが1人で捕らえた物だと言われる。

彼はその並外れた武力と知謀そして多くのアウトロー達の心を掴んで放さないカリスマ性で一代で江戸全域を支配する巨大なヤクザクランを作り上げたのだ。

メイジの死後、クランは幾つかの組織に分裂し現在は存在しない、しかしその生き様とインストラクションは今を生きる多くのヤクザ達に未だに息づいている……タナカはその様に考えている、偉大なレジェンドヤクザの生き様にソンケイを感じ深々とバイオパンダの剥製にオジギをするのだった。

#1アビス・フィッシュ・カオス完#2に続く

＃2アビス・フィッシュ・カオス

ＰＭ　２１：００　マーダー・タケノコ・ヤクザクラン本部

恐るべき武闘派ヤクザクラン、マーダー・タケノコ・ヤクザクラン本部では幹部ヤクザ達がのっぴきならないヤクザ・ブリーフィングを開いていた、だがその空気は重い。

「イヨーッ！イヨーッ！イヨーッ！・・・・・・９時です」部屋の隅に据え付けられた巨大な柱時計が時を告げる、集まった幹部達の表情は一様に固い、ブリーフィングが始まってから早２時間、会議室にはオツヤめいた沈黙が広がる。

「ザッケンナーッ！コラーッ！テメーらカカシかコラーッ！」怒声が沈黙を引き裂きクリスタル製の灰皿が床に叩き付けられる、コワイ！

「雁首揃えてナンダァ!?シケた面ぁしくさってスッゾコラーッ!」恐るべきヤクザスラングを捲くし立てるこの男、ミイラめいた老人だが眼光は鋭く全身から只ならぬアトモスフィアを漂わす、彼の名はチョクラ・レイドウ、恐るべき武闘派ヤクザクラン、マーダー・タケノコ・ヤクザクランのオヤブンである。

オヤブンからの叱責を受けその場にいる幹部ヤクザ達は押し黙る、もしこの場に一般市民が居たのならば無様に失禁、そして口から泡を吐いて哀れに失神する事だろう、電子戦争以前から幾多の修羅場をくぐり抜けてきたリアルヤクザの貫禄は伊達では無いのだ。

レイドウは幹部ヤクザ達の不甲斐なさに激怒した、更に幹部達を叱責しようとしたその時である。

ブガーッ!ブガーッ!警報音が鳴り響き赤色警報ボンボリが室内を照らす、敵対ヤク

ザクラン、ヘル・キノコ・ヤクザクランの襲撃だ！戦略チャブテーブルの中心に巨大なモニターがせり出し外の様子を映し出す、レイドウそして幹部達は厳しい表情で見守る。

外には数台のヤクザバン、それから降りたヤクザ達が「「「「スッゾコラーッ！」」」」一糸乱れぬ動作でチャカガンを発砲！「ワレドッコラーッ！」「ナマッコラーッ！」マーダー・タケノコ側も応戦！負けじとチャカガンを発砲！銃弾が飛び交い人々が逃げ惑う。

ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！「スッゾコラーッ！」「グワーッ！」「アバーッ！」ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！「ドグサレッガーッコラーッ！」「アババーッ！」乱れ飛ぶ銃弾！裏通りは銃声と怒号、悲鳴が響き渡るジゴクめいた修羅場と化した。

「スッゾスッゾコラーッ！」ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！「「「アバーッ！」」」マー

ダー・タケノコ側の銃撃でヘル・キノコのヤクザ達が倒れる！「アバーッ!?」流れ弾が酔いどれサラリマンの額に命中し絶命！ナムアミダブツ！

「「「テメッコラーッ！」」」ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！ＢＬＡＭ！「グワーッ！」「ザッケングワーッ！」ヘル・キノコ側の銃撃でマーダー・タケノコのヤクザ達が倒れる！「ペケロッパッ!?」流れ弾が通りすがりのペケロッパカルトの側頭部に命中し絶命！ナムアミダブツ・・・・・・ナムアミダブツ！

両者激しい銃撃戦を繰り広げるが形勢は徐々にマーダー・タケノコ側に傾く、ＢＲＡＴＡＴＡＴ！ＢＲＡＴＡＴＡＴ！ＢＲＡＴＡＴＡＴ！「「「「アババババーッ」」」」本部に据えらたヤクザマシンガンが火を吹きマーダー・タケノコのヤクザ達をなぎ倒し「チャルッケワレーッ！」「スマッシャコラーッ！」レッサーヤクザ達が次々にＲＰＧを発射！カブーム！カブーム！カブーム！ヤクザバンが次々と爆発炎上、マーダー・タケノコを襲撃したヤクザ達は全滅した。

路上はヤクザ達の死体が累々と並びツキジめいた惨状だ、焼け焦げたヤクザバン、通りの店舗は電飾ボンボリやＬＥＤ看板が流れ弾で破壊され、剥き出しになった電子部品が重金属酸性雨にさらされバチバチと火花を散らす。

「待てテメッコラーッ!」「カネ払えッコラーッ!」「アイエエエッ!」混乱に乗じて非合法オイラン・バーから逃げ出した男が従業員達に捕まり物陰に引きずり込まれた、物陰から聞こえる悲鳴と怒号、何かを激しく打ち据える音・・・・・破損したパチンコ屋の看板はパの字が激しく明滅しそして消えた、物陰から聞こえていた悲鳴はもう聞こえない。

戦闘が終了してから１０分、オヤフコウ・ストリートは平静を取り戻す、ヤクザの抗争などここではチャメシ・インシデント、軒を連ねた違法店舗の従業員は手早く焼け焦げたヤクザバンや飛び散った電飾の破片を片付ける、後1時間もすればマッポ達が来て形だけの事情聴取を行いそれで終わりだ、何時もと変わらぬ風景、何時もと変わらぬ日常、何時もと変わらぬカオスがここには有る。

その光景をモニター越しに眺めるマーダー・タケノコ首脳陣、そして時同じく同じ光景をモニター越しに眺める者達がいた。

上空３０ｍの地点で漂う一機のドローンは抗争の一部始終をどこかに送信し続ける。

ネオサイタマ市内ネオカブキチョ某所

オヤフコウ・ストリートに程近い立地にその建物はあった、５階建ての商業ビルには「ニコニコ・サラリマン・ファイナンス」「学生や主婦にもお金貸します」「良心的な取り立て」「どの様な方法でも返済できます」・・・・・・欺瞞的電飾看板が外壁を飾る、一見するとどこにでもある低所得者向けの金融機関に見える、しかし、この建物が有力ヤクザクラン、ヘル・キノコ・ヤクザクランのアジトである。

その最上階にある会長室に据えられた巨大なモニターを十数人のヤクザが食い入る様に見据える、リアルタイムで送信される抗争現場を見守るが襲撃部隊の壊滅するとヤクザ達は一斉にため息が漏らす。

天を仰ぐ者、頭を抱え俯く者、首を左右に振る者・・・・・・室内はオツヤ・リチュアルめいた陰鬱な空気につつまれる、その空気を下品な笑い声が引き裂く。

会長室に据えられた上質なソファーに深々と腰を下ろし愉しげに笑う男、何者なのだろうか？周囲のヤクザ達がヤクザスーツを着込む中、この男は派手だが安っぽいジャンパーに身を包む、雑用に呼ばれたレッサーヤクザか？だが普通のヤクザクランならば一介のレッサーヤクザがこの様なシツレイな振る舞いをすれば囲んで棒で打たれた挙げ句ケジメを強いられる事だろう。

その男の笑い声に周囲の者は一瞬不快な様子で見やる、・・・・・・程なく笑うのを止め、スキンヘッドを光らせヘビめいた眼で周囲の者達に「だから言ったろ？アレじゃ足りないって」嘲笑を浮かべる口元はメンポ（注：面頬）で覆われている。

そして男が身に付けているベルトのバックルを見よ！クロスしたカタナに「キ」「リ」「ス」「テ」の四文字、ナムアミダブツ！この男はソウカイヤのニンジャだ！

＃２アビス・フィッシュ・カオス完＃３に続く

＃3アビス・フィッシュ・カオス

「だから言っただろ?アレじゃ足りないって」嘲笑を浮かべる口元はメンポ（注：面頬）で覆われている。

そして男が身に付けているベルトのバックルを見よ!クロスしたカタナに「キ」「リ」「ス」「テ」の四文字、ナムアミダブツ!この男はソウカイヤのニンジャだ!

男はタバコを取り出すと傍らで控えている紫色の顔をしたヤクザに火を付けさせ、それを一口含むと紫煙を吐き出し好き勝手に感想を述べる。

「人数が足りない、次は今回の3倍のクローンヤクザを購入しろ」チンピラめいた男は無慈悲に言い放つ「「「「アイエッ!」」」」悲鳴を上げるヤクザ達、口調こそ丁寧だが醸し出す空気は有無を言わせぬ圧力アトモスフィアを漂わせる。

「それからオムラのマシンガンを全員に持たせろ、あれは良いものだ」「「「「アイエエ

エッ！」」」」たまりかねたグレーターヤクザの一人が抗議する。

「チョッ！チョット待ってくだせぇ、アウトレイジ＝サン」「イヤーッ！」「アバーッ！」ムゴイ！アウトレイジと呼ばれたニンジャは右フック！ヤクザの首は４６０度回転し吹き飛んだ！生首が勢い良く壁に掲げられたヘル・キノコクランのエンブレム叩き付けられクランのオヤブン、キムタの足元に転がる。

「無駄口を叩かない事だ、これは要望では無い命令だ」アウトレイジは無慈悲に言い放つ、周囲のヤクザはアウトレイジの殺気に気圧され一言も発する事が出来ない、居並ぶヤクザ達は皆、しめやかに失禁！

幹部達がブザマに失禁する中オヤブンのキムタのみはアウトレイジを睨みつける、その様子を薄笑いを浮かべ嘲笑するアウトレイジ。

「・・・・・・アウトレイジ＝サン、アンタの言いたい事は良く分かる、だがウチも余裕が実際無い、ラオモト＝サンへのミカジメを払うだけで手一杯だ、新たなクローンヤクザなど「ならばウチからローンを組む事だ」キムタの話を遮る。

「土地・・・建物・・・テナントの権利、そういった物をシンジケートに差し出す事だ、それをネコソギ・ファンドが査定し適切な評価で資金を貸し出す、当然利息は発生するが良心的だ」欺瞞！

（何言ってやがる！アンタ達からカネを借りたらオシマイだ！）裏社会に身を置くキムタはネコソギ・ファンドの悪辣な取り立てを知っている、自分も違法金融業を営み大勢の人間をジゴクに落とし、それ以上多くの人生を狂わせて来たが彼らのやり口はそれ以上に悪辣である。

「その資金を元に戦力を整えろ、商談はシンジケートを必ず通すように、我々がヨロシサンとオムラに話を通すから特別価格で購入できる、その際手数料の支払いを忘れるな」「アイエェ・・・」キムタは悲鳴を上げる。

その様子を気にする事無くアウトレイジは続ける「クローンと銃は最新型を購入しろ、高額のリベートが発生するからな」「我々にキャッシュバックされるんですか？」キムタの問いに「当然我々ソウカイヤが頂く」アウトレイジは無慈悲に言い放つ。

「アウトレイジ＝サン！そりゃ横暴ってもんだ！」思わず声を荒げるキムタに「・・・・・・ンダッテメッコラァ・・・・・・」

アウトレイジの表情が、口調が変わる。

「ザッケンナーコラ！テメッ！スッゾコラーッ！」目を血走らせヤクザスラングをまくし立てる「ワレドッコラー！ナマックラーッ！」アウトレイジは口から唾を飛ばしキムタを罵倒する、腹立ち紛れに足元に転がるヤクザの首なし死体を力任せに蹴飛ばした。

首なし死体は錐揉み回転しながら事務所の防弾ガラスを突き破り道路を挟んだ向かい側の雑居ビルの窓ガラスに突き刺さる。

「「「「アイエェェェッ・・・・・・！」」」」アウトレイジの怒号にヤクザ達はしめやかに失禁した、ニンジャの殺気交じりの怒号を受け耐えられる人間などそうはいない、只一人、オヤブンのキムタだけは眼光鋭く睨み返す、人生の半分以上を暴力に捧げて生きてきただけの事はある、しかし。

その顔には脂汗が浮かび背中には冷たい物が流れる、そして股間に感じる生温かい湿り気、この場であからさまに失禁しないのはオヤブンとしての矜持か。

「いいか、キムタ＝サン、コレは関係者全てにメリットのある話だ」落ち着きを取り戻したアウトレイジは聞き分けの無い子供に言い聞かせるかの様にキムタに言い聞かせる。

「先ずは状況の把握だ、ヘル・キノコクランはマーダー・タケノコクランと抗争中だが状況は思わしくは無い、よって戦力を増強したい、そうだな？」「・・・・・・アッハイ」キムタは頷く、「その為にクローンヤクザの導入と装備の充実させる必要がある、そうだな？「・・・・・・アッハイ」キムタは頷く。

「その為の資金が足りない、よってネコソギ・ファンドから資金を調達する」「あんたらは戦力を強化できファンドは土地や建物を手にする、そして利息も頂戴する正にＷｉｎ－
Ｗｉｎな関係だ」「・・・・・・アッハイ」虚ろな目でキムタは頷く。

「そしてシンジケートはアンタ達ヤクザと暗黒メガコーポの仲介役となる、ヘル・キノコ

クランは特別な価格でクローンヤクザや銃を買える、我々は仲介役手数料を頂く、これもＷｉｎ－Ｗｉｎな関係という物だ」「・・・・・・アッハイ」マグロめいた目でキムタは頷く。

「我らソウカイヤは暗黒メガコーポに顧客を紹介する、そして彼らは売上を伸ばし我々はリベートを受け取る、どうだ実際誰も損をしないだろう？」もはや返事をする気力すら無くキムタは無言で頷く。

キムタの様子を満足げに嗤うと「灰皿」傍らに控えている紫色の顔をした男に指示する、男はおずおずと焼けただれた両手を差し出す。

アウトレイジは無言で未だ火がくすぶっているタバコを押し付ける「グワーッ！」肉が焼け焦げる男と叫び声が事務所に響く。

ムゴイ！何たる非道か！ヤクザといえどここまでされるいわれは無い！紫色の顔の男はその場にうずくまる、アウトレイジは男の脇にしゃがみ込みニヤニヤと薄笑いを浮かべ苦しむ男の顔を覗き込んだ。

「アニキ・・・・・情けねぇ声出さないで下さいよ、以前アニキ自身が言ってたじゃネエですか『辛れぇ事、苦しい事を呑み込んでこそ真のオトコ』でしたっけ？自分バカなんで良くは覚えてねぇんですよ」親しげに語り掛けるがそのヘビめいた眼は冷ややかである。

「今の自分があるのはアニキのおかげなんスよ、アニキにはアレコレいろんなインストラクションを貰いましたからねぇ・・・・・骨身にしみるほどに」冷ややかな眼に殺意が宿る。

「・・・・・・ッ！アイエエ・・・・・・ッ！ゴ・・・ゴボボボーッ！」アウトレイジの殺意と憎悪に満ちた眼を直視したアニキと呼ばれた男、サメジマは激症性ＮＲＳ（ニンジャリアリティショック）を発症！激しく痙攣した後失禁！口からは吐瀉物を吐き出し失神した。

倒れた元アニキ分であるサメジマの頭を踏みにじりながらアウトレイジは嘲笑する、ネンコを重視する日本の社会的通念において許されざる暴挙である、ヤクザクランにお

いては尚更の事だ。

・・・・・・だが彼らソウカイニンジャを掣肘する存在はいない、強大なヤクザ戦力と経済力、ネオサイタマ市警をも手玉に取る政治力・・・・・・そしてニンジャ、うかつにも彼らの怒りに触れたら最後、その日の内にタマ・リバーに無残な屍を浮かべる事になるだろう。

「アニキ・・・アンタには本当に世話になったんだ、礼はまだまだ終わっちゃいねえんだ・・・楽にくたばってくれるなよ」ゾッとする様な冷たい口調で言い捨てるとキムタに振り向き「それじゃキムタ＝サン、抵当の件に関しては明日中にでもコチラに提出してもらう、ラオモト＝サンも目を通すんだ舐めた事はしてくれんなよ」

言いたい事を言い捨てアウトレイジは外に待たせてある家紋タクシーに乗り込むとトコロザワピラーを目指しネオサイタマの闇に消えるのだった。

＃3アビス・フィッシュ・カオス完＃4アビス・フィッシュ・カオスに続く

＃４アビス・フィッシュ・カオス

アウトレイジがヘル・キノコ・ヤクザクランの事務所で横暴の限りを尽くしたいた頃、マーダー・タケノコクランでは未だに会議が続いていた。

長時間の会議で出席しているヤクザ幹部達は一様に疲労を顔に滲ませていた、建設的な意見が出ず否定の否定が繰り返される不毛な会議・・・・・・平安時代末期、北条早雲がエド・トクガワの大軍に居城を包囲され打開策が浮かばずに会議を繰り返しいたずらに時を費やしたオダワラ・ミーティングの故事を思い起こさせる。

幹部達は皆クランの窮状を理解はしていた、なるほど今回もヘル・キノコの襲撃を退けた、だが次の攻撃は今までのように退ける事は出来るのか？圧倒的な敵対ヤクザクランの攻勢に自分達マーダー・タケノコクランは人的、資金的に耐えられるのか。

その答えは・・・・・・否だ、ヘル・キノコクランだけならばなんとかなるであろう、しかし彼らの背後には巨大な暗黒ニンジャ武力組織ソウカイシンジケートが控えているのは間違い無い。

ヘル・キノコクランの攻勢を凌ぎきれたとしてもソウカイヤが本気でマーダー・タケノコを潰しにかかれば1時間もせずこの抗争は終結するだろう、タケノコ側ヤクザの全滅という結末で。

彼らソウカイヤにとって何も難しい事では無い、ニンジャを・・・・・・ソウカイニンジャを1人でも差し向ければ良いだけの話である。

ニンジャの戦闘力は実際圧倒的だ、銃弾を回避出来る動体視力と反射神経、恐るべきカラテ・・・・・並みのヤクザなど何十人いても何の問題も無く皆殺しにされるだろう、マーダー・タケノコクランもフリーランスニンジャに仕事を依頼した事もあれば妨害される事もありその実力は良く理解している。

クランの壊滅を防ぐ為に出来る事は最早ただ一つ、・・・・・・皆その方策が頭に浮かぶ、だが誰もその考えを口に出す事は出来なかった、リアルヤクザとしてのプライドか、オヤブンの叱責を恐れてか。

気まずい沈黙と重苦しい空気が会議室を覆う、沈んだ表情で顔を見合わす幹部達、オヤブンのチョクラの表情が険しくなり怒声が上がろうかというその時。

「・・・・・オヤジ」チョクラの目の前、最前列の席に座っていた１人のグレーターヤクザが挙手し発言の許可を求めた、チョクラは無言で頷く、仕立ての良い高級感漂うグレーのヤクザスーツに身を包んだ壮年が立ち上がる。

浅黒く焼けた肌、顔面に付けられたカタナ傷そして全身から漂う暴力的アトモスフィア・・・・・・只のヤクザでは無いことは一目瞭然である、男の名はササギ・リュウジ恐るべき武闘派ヤクザクラン、マーダー・タケノコ・ヤクザクランのＮｏ２でありチョクラの後継者と目されている男だ。

武闘派ヤクザクランの幹部の名に恥じないカラテのワザマエを誇り若い頃から数々の殺人クエストやカチコミ・ミッションを成功させてきた猛者であり、また、幾つもの合法・非合法のシノギ・ビスで大きな利益をクランにもたらした大黒柱的存在でありクランの内外で大きく名を轟かしていた。

立ち上がるササギにこの場に集まった一同の視線が注がれる、ある者は期待の、ある者は信頼の眼差しを送る、クランのメンバーがササギによせるソンケイはオヤブンのチヨクラに勝るとも劣らない。

場のざわめきが収まるのを待ってササギが口を開く「この場に集まった者はクランの現状は良く理解していると思う」ひと息入れて言葉を続ける「ヘル・キノコの連中との抗争は現在激化の一途を辿っている」

「我々の拠点は本部を含め連日の様に奴らの襲撃を受け多数の死傷者を出している、これを見てくれ」戦略チャブ・テーブル上のモニターには抗争開始以降の毎日の死傷者発生数、発生した金銭的損失、そして付随する各種データが有機ＬＥＤディスプレイに映

し出される。

死傷者と金銭的損失を意味する折れ線グラフは右上に跳ね上がりクランの窮状が可視化される、感覚的に厳しい状況だとは感じていたクランの幹部達だが改めて具体的に数値化されるとその危機的状況に言葉を失いジリー・プアー（訳：徐々に不利）の言葉が頭に浮かぶ。

「連中の攻撃は常軌を逸している、まともな神経ならこんなヤバレ・カバレなカチコミなどせん、だが・・・・・・これを見て貰いたい」ササギはディスプレイの画像を切り替える。

切り替わった画像は先程の襲撃の物である、襲撃側のヘル・キノコクランのヤクザ達は皆、双子の様に同じ顔、同じ身長、同じ体格である、そして別の襲撃現場の画面に切り替わる、ここでも同じ顔のヤクザ達がマーダー・タケノコの拠点を襲撃している、更に別の現場でも、これは一体・・・・・・？

「・・・・・・クローンヤクザ」ボソリと誰かが呟いた、一般市民はクローン人間の実用化を知らない、しかしネオサイタマの社会を支配する政・財・官そしてヤクザ・・・・・彼らにはクローンヤクザの存在は周知の事実であり人件費削減の観点から導入に踏み切るヤクザクランは急速に増えている、昔ながらの義理・人情といったウェットな人間関係を重んじる幾つかのヤクザクランは導入を拒んではいるがその数は少なく減少の一途を辿っている。

マーダー・タケノコもそんなヤクザクランの一つである、ヤクザとは職業では無く生き様だと信じる彼らにとってクローンヤクザの存在は嫌悪感を感じさせる存在でありモニターに映るクローンヤクザ達をマーダー・タケノコの幹部達は忌々しげに睨みつける。

呟きに頷くとササギは言葉を続ける「そう、クローンヤクザだ、ヘル・キノコの連中は戦力をクローンヤクザに切り換えている」「嘆かわしい事だ」誰かが呟いた、ヘル・キノコ・ヤクザクランも元をたどれば江戸時代から続く歴史ある組織である、これも時代の流れか。

「だがおかしいとは思わないか？ヘル・キノコの連中がこれ程のクローンヤクザを購入し連日の様にカチコミを仕掛けてくる・・・・・・それだけの資金は連中にあると思うか？」

ササギの言葉に会議室に静かなざわめきが広がる。

確かにその通りだ、クローンヤクザがリアルヤクザを雇用するよりは安く済むとは言っても無料では無い、それなりの購入予算、維持費が必要になってくる数十人規模だと決して安い金額では無い、更に武器・弾薬の費用もある、それらはどこから出たのか？

マーダー・タケノコ・ヤクザクランとヘル・キノコヤクザクラン、双方とも組織の規模、資金力、戦闘力いずれもドングリ・コンペティションでありこれ程の大規模な抗争を行える余裕は無いはずだ、後先考え無いヤバレ・カバレ作戦だとしても先に息切れするのはヘル・キノコ側だ。

だが現実は追い込まれているのは自分達でヘル・キノコは平然と戦力は増強し続けている、グレーターヤクザの一人に不吉なイメージが湧き起こる「ま・・・まさか・・・・・」

「そのまさかだ奴らヘル・キノコの野郎共ソウカイシンジケートの傘下に入りやがった」
ササギは吐き捨てるかの様に言い放った。

＃４アビス・フィッシュ・カオス完＃５に続く